

ど、銃部品の破片、薬莢20個については、埋蔵文化財として愛媛大学埋蔵文化財調査室で保管することとし、他は自衛隊が棄棄処分することとなった。

(1) 基本層序と1区の層序

1区は御幸寮中庭部分に当たるが、今回の概要報告に当たり、2010年度に実施した2～9区の調査成果も加えて、団地全域にわたるI～IV層の基本層序を設定した。1区の調査区東壁中央、調査終了時に南東部の矢板を外して土層観察した地点、SR-8に設定した先行トレンチ壁面、調査区南壁の土層断面図をつないだ図17を用いて、基本層序を報告する。

I層：瓦礫が混じる造成土。

II層：団地全域に広がる中世～近現代の水田層と洪
水でもたらされた砂礫層から構成される。II-1～II-8層に分層できる。御幸学生寄宿舎は旧愛媛県青年師範学校跡地西半部を使用しているが、愛媛県青年師範学校も旧御幸尋常高等小学校の跡地を利用している。II-1・2層は、それ以前の近世の水田層である。砂礫混じりの褐色のシルト土～砂質シルト土である。炭化物片が多く混じる。II-3層は小礫混じりのシルト土の水田層で、2010年度に調査した8-12区では完形の中世の土師器坏、8-6・8区間の管路部分では土師器の三足付き土鍋などが出土している。中世の水田層である。団地南半部の2区や8-2～7区、3・4区では、II-3層直下に灰白色砂礫層のII-4層がみられる。洪水によってもたらされた砂礫層である。ただし、II-4層は上層のII-3層の水田耕作によって削られ、1区では南壁西半部でレンズ状に残るのみである。II-5層は、やや黒みをおびた褐色の砂礫混じりのシルト～粘質シルト土の水田層である。団地全域に広がり、下底面が標高20.25～20.30mとほぼ平坦で、水田開発のために広い範囲で土地の削平が行われたものと考えられる。1区南壁西半部から中世の土師器坏の破片が出土している。II-6層は、褐色の砂礫層で、1区より南側の2～4区及び8-2～8区にひろがる。II-4層と同じく、洪水によって堆積したものである。II-7層は、団地南西部を中心として広がる小礫混じ

りの砂質シルト質土の水田層である。上層のII-6層が比較的厚く残存する2区西端部と8-7区では、II-7層の上面で人間や牛の足跡と考えられる窪みが数多く検出できた。II-8層は、団地東半部に分布する褐色～黄褐色の砂礫土である。細砂・粗砂を主体とし、土壤化が進む。後述するSR-8①層を母材とする畠耕作土と考えた。

III層：団地西半部を中心として分布する黒褐色～暗褐色のシルト土層である。最上部の灰色みをおびた灰褐色のIII-1層、黒みがつよい黒褐色～暗褐色の径2mm前後の小礫～粗砂が多く混じる。III-2層、下部のIV層への漸移層にあたる淡い暗褐色のIII-3層に分層できる。1区では、上層のII層の水田開発に伴ってIII-1・2層の大部分が削られ、III-3層だけが残されている。また、III-1層は攪拌された痕跡が認められ、古墳時代後期や弥生時代の土器片が点々と出土する。

IV層：上部は明黄褐色シルトで、下部ほど砂礫が多く混じりはじめ、オーリーブ色や灰白色～灰色の砂層に変化する。最上部の明黄褐色シルトであるIV-1層、細砂・粗砂を主体とするIV-2～IV-4層、径3～10cmの扁平な円礫が多く混じるIV-5層に分層できる。1区では、シルト部分を一部掘り下げたところ、縄文土器や炭化物の細片が出土した。しかし、明確な遺構の掘り形は確認できなかった。なお、2010年度に調査した6区ではIV-2層上面でIV-1層と類似する埋土をもつ小穴が出土している。

(2) 1区の遺構の概要

以上の基本層序の中で、II-3・5・7層は中世に遡る水田層である。II-8層も、層序関係から中世段階の畠と考えられる。ただし、1区では、それぞれ上層の水田耕作によって、洪水砂礫のII-4・6層が削られ残存しておらず、水田面の面的な調査ができないと判断したため、土層断面による調査にとどめることとした。

弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含すると予想していたIII層は、II-7層・II-8層の耕作によって削平され、調査区南西部の一部で、その広がりを確認で

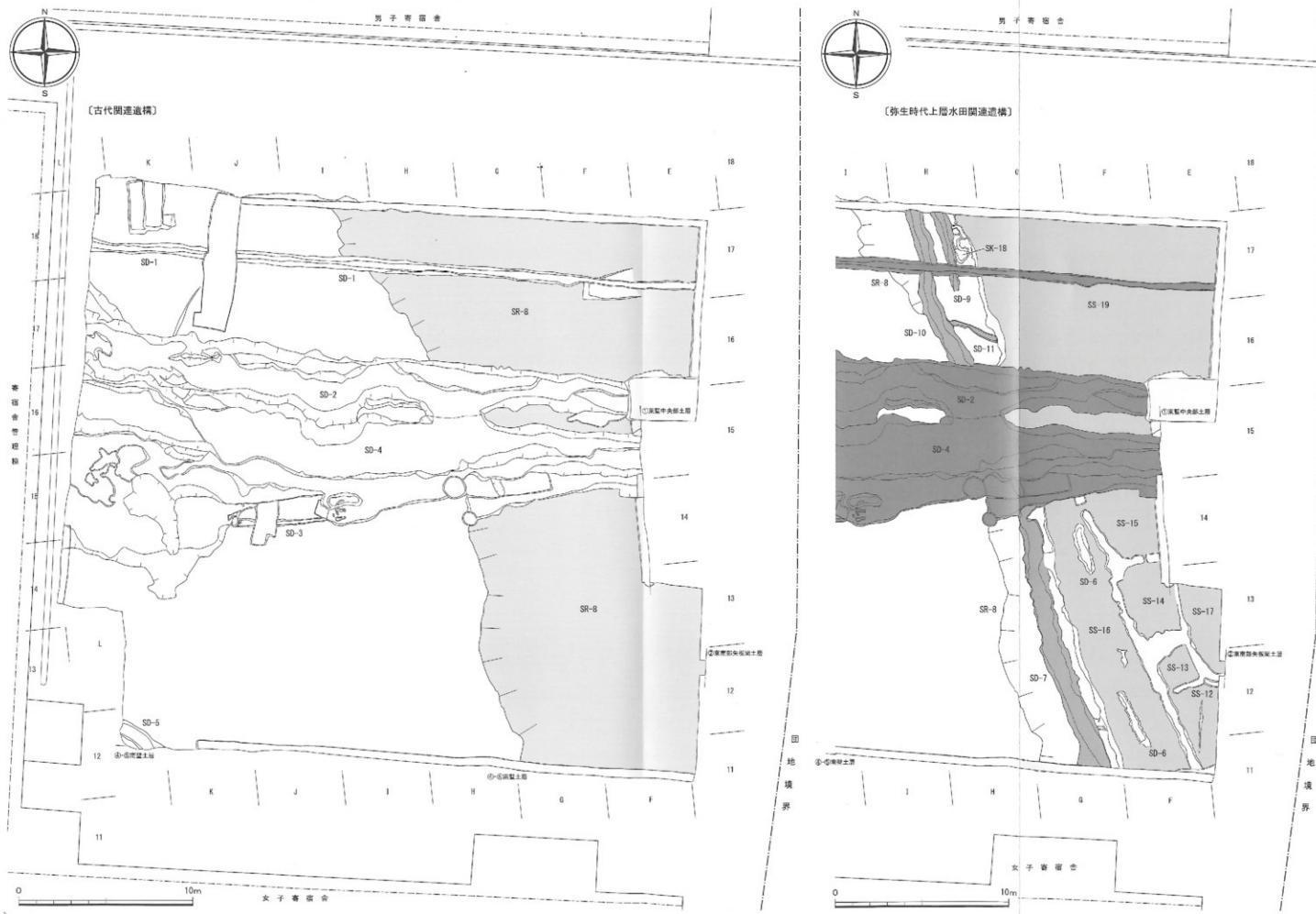


図16 00905調査1区古代および弥生時代上層水田関連遺構実測図 (1 / 200)



写真84 00905調査1区表土剥ぎ作業風景（北西から）

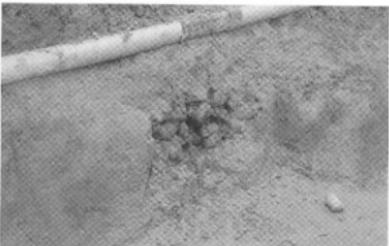


写真85 00905調査1区調査区西壁の手榴弾・模擬弾の出土状況



写真86 00905調査出土した手榴弾・模擬弾・薬莢等



写真87 00905調査1区の造構検出状況（北東から）



写真88 00905調査1区SD-1およびSD-2・4完掘状況（北東から）



写真89 00905調査1区東半SD-2・4土層断面（南西から）

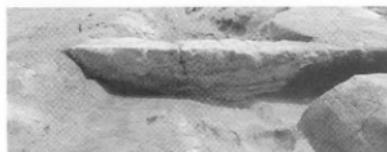


写真90 00905調査1区東部SD-2土層断面



写真91 00905調査1区東部SD-4土層断面（西から）



写真92 00905調査1区東半部の弥生時代造構の検出状況（北西から）



写真93 00905調査1区東南部上層水田畦畔とSD-7の検出状況（東から）



写真94 00905調査1区上層水田とSD-7・9～11完掘状況（北から）



写真95 00905調査1区東南部の上層水田とSD-7完掘状況（北西から）



写真96 00905調査1区東部の上層水田とSD-7完掘状況（南から）



写真97 00905調査1区東南部の上層水田面の調査風景



写真99 00905調査1区東北部の上層水田面の足跡検出状況



写真98 00905調査1区北東部の上層水田面の調査風景



写真100 00905調査1区SD-7底面に残る鉄・錆に残る
掘削痕跡



写真101 00905調査1区東南部の上層水田下層の土層堆積状況（北西から）



写真102 00905調査1区南東部の下層水田完掘状況（遠景、北西から）



写真103 00905調査1区南東部の下層水田とSD-21の完掘状況（北西から）

きたのみである。このⅢ層上面もしくはⅣ層上面で、奈良時代後半～平安時代初頭に比定できる古代の溝（SD-1～5）と、1区東半部に広がる自然流路SR-8を確認した。SR-8の最上部には、弥生時代前期～中期後半の水田（SS-12～17・19・24～33）および溝（SD-6・7・9～11・21～23）などが埋積されていた。なお、SR-8の弥生時代の水田層より下部は東西方向に先行トレーナーを設定して調査したにとどまったが（写真101）、2010年度に実施した6区の調査では、その延長部の落ち際に縄文時代晚期の遺物包含層を確認できた。

Ⅳ層については、表土剥ぎ時点で縄文土器が出土した古代の溝であるSD-2・4を挟んで1区の北西部と南西部でⅣ-1層を精査した。縄文時代後期と考えられる土器の細片や炭化物が出土したが、遺構の掘り形は確認できなかった。

①古代の遺構（図16、写真87～91）

SD-1～5の5条の溝が出土している。この中で、出土遺物からSD-2とSD-4は位置をずらして掘り直された東西方向に直線的にのびる溝、さらにはほ5mの間隔をおいてSD-1が東西方向に開削されている。いずれの溝も、底面に粗砂や細砂のラミナが縦状に互層堆積する。

SD-1は、Ⅱ層の直下で検出できたほぼ東西方向に直線的に開削された溝である。幅80cm前後を測る。奈良時代後半～平安時代初頭の遺物が点々と出土している。

SD-2は、SD-4の北側肩部と重複しながら、ほぼ東西にのびる幅25～3mの溝である。奈良時代後半～平安時代初頭の土師器・須恵器が大量に出土している。また、古墳時代後期の須恵器や、後述するSR-8の最上部の弥生時代の遺構から洗い出された弥生時代前期～中期前半の土器片などが出土している。

SD-3は、SD-4の南側に位置する。SD-4の両側が広がり、ごく一部しか確認できなかった。掘り込みも浅く船底状で、SD-4との合流地点の土層断面では切り合い関係は確認できなかった。奈良時代後半～平安時代初頭の須恵器の高台付き壺が出土し、SD-4と同時期の水路と考える。

SD-4は、1区の調査区東壁中央の土層断面の観察では、弥生時代の上層水田層（SR-8②・③層）を切り込んでいる。ほぼ東西方向にのびる幅4～7mほど の水路で、1区西部では掘り込まれたⅣ層が砂を主体

とするⅣ-2層であるため、かなり浸食されていた。大量の奈良時代後半～平安時代初頭の土師器・須恵器とともに、古墳時代後期・弥生時代前期～中期・縄文土器の破片が出土している。

SD-5は、1区南西隅で出土した幅85～95cmの溝で、Ⅲ層上面で出土した。上層のⅡ層の水田耕作で削られて、深さ10cm前後しか残存していない。灰白色～灰オリーブ色の粗砂で埋積され、奈良時代～平安時代初頭の須恵器の高台付き壺、6世紀末の須恵器壺身などの少量の遺物が出土している。

②弥生時代の遺構（図16～18、写真93～101）

弥生時代の遺構のほとんどは、1区東半部のSR-8の最上面に埋積されている。SD-6・7・9～11・21～23の8条の溝、水口に設けられたSK-18土壤、そして水田SS-12～17・19・24～33が出土している。この中で、SD-6・7・9・SK-18、SS-12～17は、洪水でもたらされた砂礫SR-8①で埋没した遺構である。SD-10・11・21・SS-24～33は、その下層の砂礫SR-8④層で埋積された遺構である。発掘時には、前者を上層水田、後者を下層水田として調査を進めた。これらの遺構出土の遺物は少なく、遺構の時期比定は今後とも検討していく必要があるが、土器はすべて弥生時代前期～中期前半のもので、上層・下層水田とともに、この時期幅で捉えて問題はないと考える。

また、1区北東部のSS-19は上層水田に対応するものと考えられるが、SR-8④層の砂礫がみられず、上下の水田層を明確に区分することができなかった。上面には人間の足跡と考えられる窪みが多数残されていた。

この他、調査区南壁面では、表土剥ぎ作業の時点では気づかなかった土壌と考えられる落ち込みを確認できた。Ⅲ-2層と共通する砂礫混じりの黒褐色シルト土で、Ⅳ-1層の小指先大の小塊が含まれている。

〔上層水田関連遺構〕

SD-6は、1区南東部のSS-16の上面で検出した溝である。SR-8①層から掘り込まれている。しかし、出土遺物がないため時期を確定できない。

SD-7・9は、SD-2・4に切られて途切れていますが、一連の溝である。SR-8の落ち際とはほ並行して南東・北西にのびる。幅135cm前後、深さ10～18cm前後を測る。SD-7南半部には、溝底面に鉢や壺による掘削痕跡が残されていた。また、大形の土器片が溝底に貼り付いた状況で出土している。SD-7・9からは、弥生



図18 00905調査1区弥生時代水田関連遺構実測図(縮尺1/200)

時代の遺物しか出土していない。

SK-18は、1区北東部のSD-9の東側の灰白色の粗砂・砂礫で埋積されていた甕み状の遺構である。弥生土器の鉢の口縁部小片が1点出土した。

SS-12～17は、SR-8①層に覆われた水田面である。人間の足跡と考えられる小さな窪みがみられる。SS-16を除き、SR-8②層を耕土とし、4～20mの小区画水田である。SS-16については、砂礫が多く混じるSR-③層を耕土とし、SD-7に並行する細長い水田であるが、小畦で細かく分けられていた可能性が高い。
〔下層水田関連遺構〕

SD-10・21は一連の溝である。ほぼSR-8の落ち際に掘られ、溝幅は12～25mを測る。SD-10は、南北

で埋積状況が大きく異なる。北側は砂礫混じりの砂質土であるが、南側は灰白色の粗砂と小砂からなる砂礫で埋まっている。

SD-11は、SD-10から南東に向かってのびる溝である。径2mm前後の砂礫混じりの粗砂を主体とする灰白色砂礫を埋土とする。下部にはⅡ-6層が混じる。溝底はかなりの凹凸がある。掘り込みは浅い。配置関係からSD-10から東側の水田へ給水させるための水路と考える。

SD-22・23は、SD-21とほぼ並行して掘られた溝である。SD-22は、灰色の径2～4mmの小砂や粗砂を主体として灰黄色シルトが混じる埋土で、灰青色シルトはSD-21の一部の埋土と同じく、IV-1層上部にみられ

るⅢ層との漸移層部分の堆積土である。遺物は弥生土器と考えられる肩部小片が1点出土したのみである。SD-23は、一部をSD-6として掘り下げてしまったが、灰色～灰白色の粗砂や径2mm前後の小砾からなる砂礫を埋土とする。遺物は出土しているが、量は少ない。

SS-24～33は、湿地環境で堆積したSR-8⑩層を母材とする水田耕土である。上層水田のSS-12～17と同じく、小区画の水田で、人間の足跡と考えられる窪みが数多く残されていた。

3 調査のまとめ

今回、調査概要を報告した1区では、奈良時代後半～平安時代初めの水路群、弥生時代前期～中期後半の水田及び関連の水路群が出土した。調査に着手する以前の確認調査などは予想していた以上の遺構と遺物が

検出された。弥生時代前期～中期後半の水田関連の遺構は、愛媛県内ではもっとも遅い資料である。1区に統けて2010年度に調査した2～9区でも、同様に弥生時代の水利施設群が確認されている。水田稲作農耕が定着していく弥生時代前半期の具体的な水田開発の姿を解明できる資料として貴重である。

また、奈良時代後半～平安時代初めのSD-2・4は、その延長部分を2010年度調査の7区でも確認できている。並行して掘られたSD-1を含めて、ほぼ東西に直線的に走る水路で、それ以前の旧微地形の地形傾斜と直交する方向に開墾されている。伴う水田や畠などは、2010年度の調査結果を含めた検討が必要であるが、奈良時代後半～平安時代初めに、御幸遺跡周辺で大規模な土地開発が進んだことを示唆する資料である。
(田崎)

00906 (樽味団地) 市道桑原82号線道路改良工事に伴う上水道引込管・電柱・ガス引込管移設工事に伴う調査

調査地点 松山市樽味3丁目5番

愛媛大学樽味団地

調査面積 4.6m²

調査期間 2009年10月27日・11月2日

調査の種別 立会調査

調査担当 田崎博之・三吉秀充

調査補助 宮崎直栄・濱田美加

依頼文書 埋蔵文化財確認申請にかかる同意書
について (平成21年10月2日付)

1 調査にいたる経緯

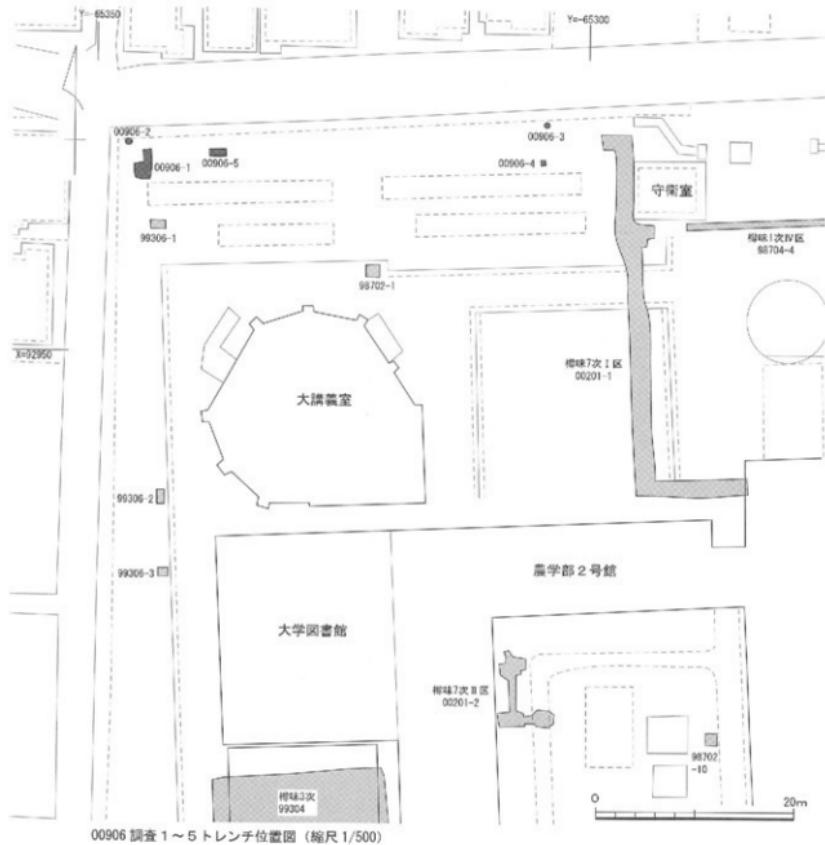
農学部事務課長より、樽味団地北側を走る市道桑原82号線道路改良工事に伴って、上水道引込管・電柱・ガス引込管移設工事が必要な旨、連絡があった。本来は、上水道引込管については愛媛大学、電柱は(株)四国電力、ガス管は(株)四国ガスが調査することになるが、松山市教育委員会からの依頼で愛媛大学が3工事に伴う調査を行うこととなり、一括して調査番号を付して立会調査を実施することとなった。

2 調査の記録

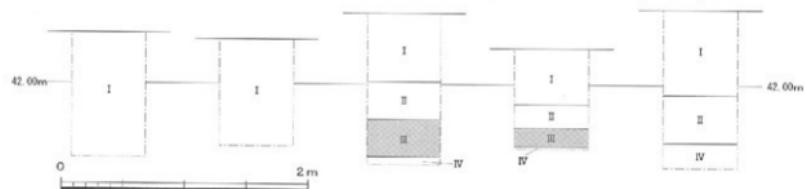
今回の工事に伴う調査地点は、上水道引込管移設工事地点の1ヶ所、電柱設置工事地点の4ヶ所、ガス管移設地点の1ヶ所である。ただし、電柱支線基礎2ヶ所のうち1ヶ所は上水道引込管移設工事地点と重なることから、都合5ヶ所の調査となった。上水道引込管移設工事地点を1トレンチ、西側の電柱移設地点を2トレンチ、東側の電柱移設地点を3トレンチ、その支線基礎設置地点を4トレンチ、ガス管移設地点を5トレンチとして、工事に立ち会い調査を実施した(図19)。また、調査に当たっては、樽味団地全域で設定している基本層序I～IV層に準じて土層記録をとることとした。

(1) 1トレンチ (図19、写真104・105)

樽味団地北西角に位置する。なお、後述する2トレンチにあたる電柱の移設に伴って支線基礎が設置される地点は1トレンチ内に位置するので、一括して調査を行った。現地表下102cm(標高41.40m)まで掘り下



①: 1トレンチ ②: 2トレンチ ③: 3トレンチ ④: 4トレンチ ⑤: 5トレンチ



1~5トレンチ土層柱状図 (縮尺1/40)

図19 00906調査地点位置図および土層柱状図 (縮尺1/500・1/40)



写真104 00906調査1 トレンチ調査風景（南東から）



写真105 00906調査1 トレンチ完掘状況（南から）



写真106 00906調査2 トレンチ調査風景（北西から）



写真107 00906調査2 トレンチ土層（北西から）



写真108 00906調査3 トレンチ調査風景（北から）



写真109 00906調査3 トレンチ土層（南から）



写真110 00906調査4 トレンチ近景（東から）



写真111 00906調査4 トレンチ土層（東から）



写真112 00906調査5 トレンチ近景（東から）



写真113 00906調査5 トレンチ土層（東から）

げたが、造成土である基本層序Ⅰ層がつづく。南側に4mほど離れた隣接する99306調査1トレンチでは標高41.32m、同2トレンチでは41.41mで基本層序Ⅲ層が現れ、その上層には団地造成以前の水田層である厚さ20cmほどのⅡ層が確認されている。本調査地点では、41.40mまでⅠ層がつづくことから、西側及び北側の石垣工事のため既に搅乱されているものと判断した。

(2) 2トレンチ（図19、写真106・107）

1トレンチの北西に隣接する地点で、道路改良工事に伴う西側の電柱移設地点である。径60cmの狭い調査範囲であるが、現地表下88cm（標高41.49m）まで掘り下げた。造成土である基本層序Ⅰ層がつづく。1トレンチと同じく、基本層序Ⅱ・Ⅲ層とともに既に破壊されているものと判断した。

(3) 3トレンチ（図19、写真108・109）

樽味団地北西角から東へ44.5mほど離れた東側の電柱移設地点である。現地表下75cmで基本層序Ⅱ層、87cm（標高41.71m）ほどで同Ⅲ層が現れた。Ⅲ層は31cmほどの厚さを測り、古墳時代後期の土器と考えら

れる土器片が出土した。現地表下117cm以下は基本層序Ⅳ層で、遺物は出土していない。

(4) 4トレンチ（図19、写真110・111）

3トレンチにあたる東側の電柱移設に伴って設置される支線基礎部分である。現地表下45cmで基本層序Ⅱ層、65cm（標高41.65m）で同Ⅲ層が現れた。Ⅲ層は15cmほどの厚さを測り、古墳時代後期の土器と考えられる土器片が出土した。

(5) 5トレンチ（図19、写真112・113）

樽味団地北西隅にあるガス本管が市道側から引き込まれている簡易施設の北側に位置する。現地表下130cm（標高41.32m）まで掘り下げたところ、基本層序Ⅰ層がつづき、現地表下100～110cmで2本のガス本管が現れた。調査範囲内は既設のガス管理設工事の際に破壊されているものと判断した。なお、工事地点西壁面で、現地表下70cmでⅡ層、109cm（標高41.53m）でⅣ層を確認した。周辺ではⅢ層は削平されているものと考えられる。

3 調査のまとめ

今回の調査では、3・4トレンチで、古墳時代後期の土器器と考えられる土器片が出土する基本層序Ⅲ層の黒褐色シルト質土層を確認することができた。西側へ5~7mほど離れた樽味遺跡7次調査I区（調査番号：00201-1）では、古墳時代後期の堅穴式住居跡、掘立柱建物、土壙等が出土しており、3・4トレンチで確認したⅢ層は層厚があり、遺物も出土していることから、遺構の埋土部分である可能性が高い。今回調

査を行った1・2・5トレンチでは、Ⅲ層は既に破壊されているものと判断した。しかし、隣接する99306調査1・2トレンチでは良好な状態でⅢ層が残されており、樽味団地北西隅周辺まで遺構が濃密に分布することは明らかである。

（田崎）

00907（城北団地）理学部構内環境整備工事に伴う調査

（文京遺跡41次調査）

調査地点 松山市文京町2番5号

愛媛大学城北団地

調査面積 788m²

調査期間 2009年11月19日～2010年3月5日

調査の種別 本格調査

調査担当 三吉秀充

調査補助 宮崎直栄・濱田美加

依頼文書 施設基盤部長発事務連絡

（平成21年8月25日付）

1 調査にいたる経緯

2009年2月上旬、施設基盤部から2009年度実施事業計画の提示があり、予定事業の1つとして理学部構内環境整備工事も含まれていた。2009年度は、総合実験実習棟新営工事（文京遺跡39次調査）や60周年記念建物新営工事（文京遺跡40次調査）も予定されており、これらの発掘調査が終了した2009年9月以降に、理学部構内環境整備工事に伴う発掘調査を実施することとなつた。

2009年8月下旬になり、施設基盤部より具体的な工事内容の提示があった。工事内容を確認すると同時に、できるだけ埋蔵文化財に影響が及ばないように、調査室と施設基盤部とで協議した。しかし、やむを得ない地点については、記録保存を目的として発掘調査を実施することとなつた。上述の文京遺跡39・40次調査は、

10月までの実施となつたことに加えて、工事に伴う環境整備などの遅れから、発掘調査に着手したのは、11月19日であった。工事は3期にわたって実施されたため、発掘調査も断続的な対応となり、最終的に発掘調査が終了したのは2010年3月5日となった。

なお、発掘調査では、工事によって埋蔵文化財への直接的な影響が及ばない地点については、現地保存を行つた地点もある。

2 調査の記録

（1）基本層序

今回の調査では、城北団地で設定している基本層序I～IV層を確認した。各基本層序の特徴は以下の通りである。

I層は表土層である。

II層は、造成以前の灰色系の近世～近代の水田層である。下部には鉄分・マンガンの沈着する床土層がみられる。

III層は、弥生時代～古墳時代の遺構や遺物を包含する黒色～暗褐色系の土層である。

IV層は、縄文時代の遺構や遺物を包含する黄褐色系のシルト～砂質土層である。

（2）調査の概要

調査地点は、大きく総合研究棟北東部（I区）と理

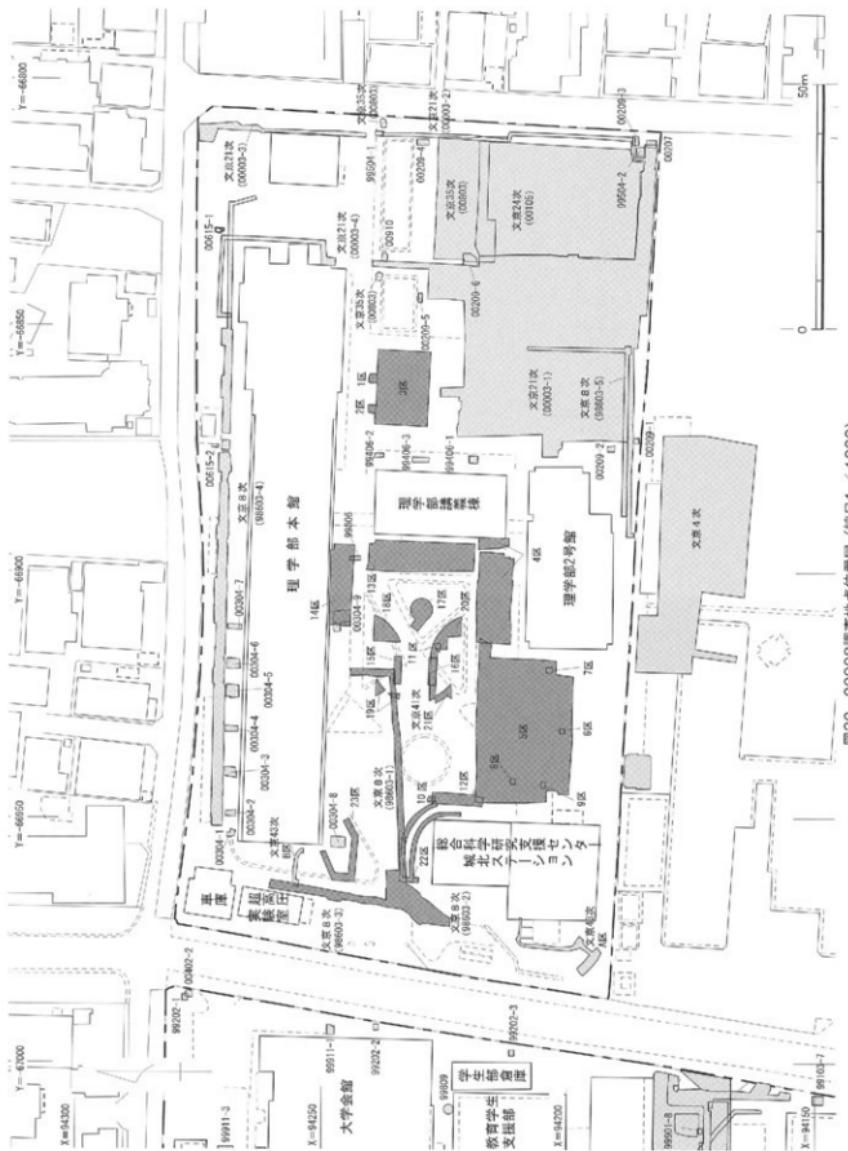


図20 00908測量地点位置図 (縮尺1 / 1000)

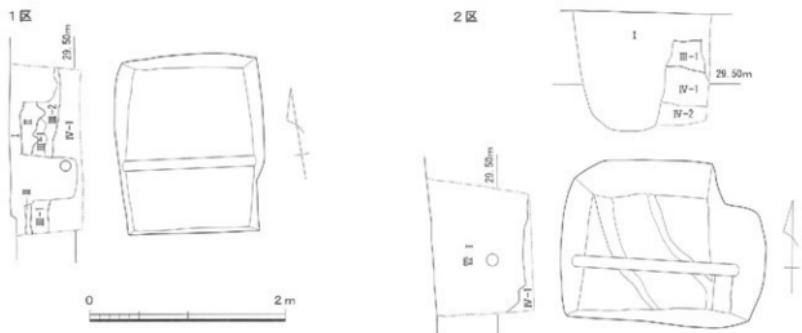


図21 00908調査1・2区平面図・土層断面図（縮尺1／50）



写真114 00907調査1～3区調査前の状況（北西から）



写真115 00907調査1～3区完掘状況（北西から）



写真116 00907調査1区完掘状況（東から）



写真117 00907調査2区完掘状況（東から）

学部本館西側南部（Ⅱ区）とからなる（図20）。

①Ⅰ区（図21、写真114～117）

I区は、排水樹設置工事地点である1区と2区、駐輪場基礎工事地点および側溝工事地点である3区からなる。

I区は東側の排水樹設置地点である（写真116）。重機を用いて、現地表下約30cmまで掘り下げを行い、I・II層直下でIII層が出土した。調査区中央部はガス管設置に伴う掘削工事で、調査区の北側は排水樹設置に伴う掘削工事によって、II層からIV層の一部がすでに破壊されていた。III層は厚さ約20cmの土層で、暗褐色砂質土のIII-1層と灰黄褐色シルトを主体として明黄褐色砂質土の丸いブロックからなるIII-2層とからなる。III層から、縄文時代晚期後半の刻目突尖土器片などを含む約30点の土器片が出土している。III層直下でIV層が出土した。IV層は明黄褐色シルトで、土器の細片が2点出土している。IV層は、現地表下約70cmまで掘り下げを行い、工事による影響がないことを確認して調査を終了した。

2区は西側の排水樹設置地点である（写真117）。重機を用いてI層の掘り下げを行ったところ、既設のガス管設置時における掘削工事によって、調査区内の大半が破壊されており、現地表下90cm～100cmでようやくIV層が出土した。調査区の北壁は破壊を免れており、同壁では、III層は現地表下30cmで、IV-1層は52cmで、IV-2層は90cmに存在している。IV-1層は、明黄褐色シルト層である。IV-2層は、明黄褐色砂質土層で、径1mm未満の砂粒を含んでいる。調査区内に残存していたのは、IV-1層である。IV-1層を現地表下1mまで人力で掘り下げを行ったが、遺物は出土しなかった。なお、I層中から近現代の陶磁器に混じって縄文時代前期～中期と考えられる縄文土器片が3個体分出土している。

3区は駐輪場屋根基礎工事および側溝工事地点である。重機を用いて現地表下35～40cmまで掘り下げを行い、瓦礫を伴ったI層が続いていることを確認した。工事では、停止面以下に影響が及ばないことから、以下の埋蔵文化財に関して現地保存することとした。所要の記録化を行い、調査を終了した。遺物は出土していない。

②Ⅱ区（図20・22、写真118～139）

II区は理学部構内西側に位置し、理学部本館、理学部講義棟、理学部2号館に囲まれた地点である。調査

区は4区～23区の計20地点である。

4区は理学部講義棟西側、理学部2号館北側に位置し、パリカー基礎工事地点である（写真119）。重機を用いて現地表下35cmまで掘り下げを行い、瓦礫を伴ったI層が続いていることを確認した。工事による埋蔵文化財への影響が及ばない、現地表下35cm以下に関しては、現地保存することとした。所要の記録化を行い、調査を終了した。遺物は出土していない。

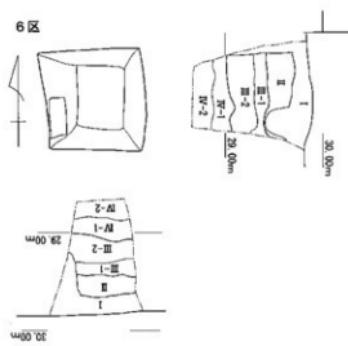
5区は理学部2号館北西部に位置し、駐輪場屋根基礎工事地点である（写真120・121）。重機を用いて現地表下40cmまで掘り下げを行い、瓦礫を伴ったI層が続いていることを確認した。工事では、停止面以下に影響が及ばないことから、以下の埋蔵文化財に関して現地保存することとした。所要の記録化を行い、調査を終了した。遺物は出土していない。

6区は理学部2号館西部に位置する街灯基礎工事地点である（写真122）。当初の整備計画では、予定されていなかったが、発掘調査に係わる届出書へ記載の調査範囲内であったため、調査段階で対応した。人力で掘り下げを行い、現地表下88cmまでI・II層が続き、直下でIII層が出土した。III層は30～40cm堆積し、III-1層とIII-2層とに分層ができる。III-1層は、灰黄褐色シルトで径1～3mmの砂礫を多く含み、まれに径1cmの円礫を含む。III-2層は灰黄褐色シルトで径1cm未満の円礫・砂礫を含んでいる。III-1層より、砂礫の割合が多い。III-2層下部は、大きく波打っており、III層が造構埋土である可能性も考えたが、調査面積が狭く確定できなかった。III層直下、現地表下120cmでIV層が出土した。IV層は、現地表下160cmまで掘り下げを行ったが造構は出土しなかった。遺物に関しては、III層中から時期不詳の土器片が数点出土している。

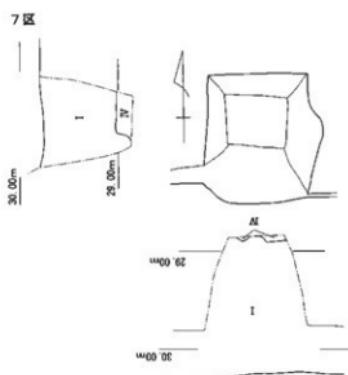
7区は理学部2号館の西に位置する排水樹工事地点である（写真123）。人力で掘り下げを行い、現地表下135cmまで瓦礫を伴ったI層が続いており、I層の直下でIV層が出土した。IV層は、浅黄色砂質土で径2mm～1cmの砂礫・円礫を含んでいる。遺物は出土していない。IV層は、現地表下140cmまで掘り下げを行い、調査を終了した。

8区は総合科学研究支援センターの東側に位置する排水樹工事地点である。人力で掘り下げを行い、現地表下70cmでII層が出土した（写真124）。調査区西部は、配管工事の際に破壊を受けていた。III層は現地表下95cmで出土し、30～35cm堆積する。III層はIII-1～III-3

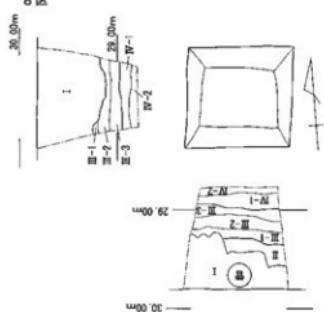
6区



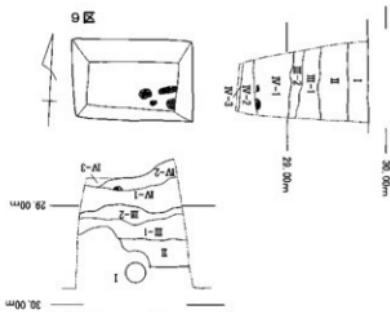
7区



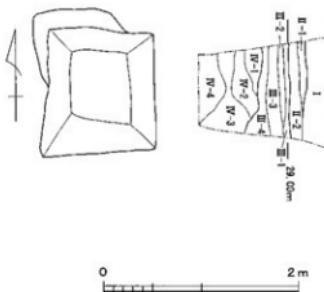
8区



9区



10区



11区

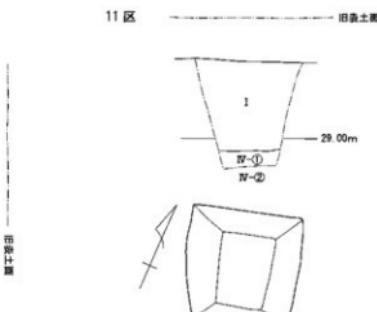


図22 00908調査6～11区平面図・土層断面図（縮尺1／50）

層からなる。Ⅲ-1層は灰黄褐色シルトで、径1～2mmの砂礫を多く含む。Ⅲ-2層にはぶい黄褐色砂質シルトで、径1～2mmの砂礫を多く含んでいる。Ⅲ-3層にはぶい黄褐色砂質シルトである。Ⅲ層中から土器片が4点出土したが、時期は不明である。現地表下130cmでⅣ層が出土した。Ⅳ層は、浅黄色砂質シルトで径1～2mmの砂礫を少量含んでいるⅣ-1層と灰黄色砂質土のⅣ-2層とからなる。Ⅳ層を現地表下153cmまで掘り下げたところで、調査を終了した。

9区は総合科学研究支援センターの東側に位置する排水樋工事地点である（写真125）。人力で掘り下げを行い、現地表下約70cmでⅡ層、約1mでⅢ層が出土した。Ⅲ層は最厚部で約35cm堆積する。南壁土層における観察では、Ⅲ層下部が大きく波打っており、Ⅲ層は遺構内埋土である可能性も考えられたが、調査面積が狭いため、断定はできない。Ⅲ層はⅢ-1層とⅢ-2層とからなる。Ⅲ-1層はにぶい黄褐色砂質シルトで、径1～2mmの砂礫を多く含んでいる。Ⅲ-2層はにぶい黄褐色砂質シルトで、径1～2mmの砂礫を含んでいる。Ⅲ層中から時期不詳の土器片が約10点出土している。Ⅲ層直下、現地表下約125cmでⅣ層を検出した。Ⅳ層は、Ⅳ-1、Ⅳ-2、Ⅳ-3層の3層からなる。Ⅳ-1層は浅黄色シルトで、径1～2mmの砂礫を含んでいる。また、1辺約5cmの炭化物片や焼土塊を含んでいる。Ⅳ-2層は灰黄色シルトで、焼土塊を含んでいる。Ⅳ-1・2層から出土している焼土塊は、1辺10～15cm前後のかたく焼けしまった塊であり、調査区の南東部を中心としてコンテナ1箱分が出土している。Ⅳ-2層下で検出したⅣ-3は灰黄色砂質土で、焼土塊を含まない。現地表下165～175cmまで掘り下げた時点で、作業環境を考慮して調査を終了した。

10区は総合科学研究支援センターの北東部に位置する外灯基礎工事地点である（写真126・127）。人力で掘り下げを行い、現地表下約80cmでⅡ層が出土した。Ⅱ層中では、南北方向に統く石積みが出土した。石積みの性格については不明である。現地表下約1mでⅢ層が出土した。Ⅲ層はⅢ-1～Ⅲ-4層に分層できる。Ⅲ-1層は灰黄褐色シルトで、径1mm未満の砂粒が多い。Ⅲ-2層は灰黄色シルトで径1mmの砂粒を含んでいる。Ⅲ-3層は灰褐色シルトで、径5mm未満の砂礫を含む。Ⅲ-4層は灰黄褐色砂質シルトで、径3mm未満の砂礫を多く含む。Ⅲ層から繩文・弥生土器片が出土しているが、詳細な時期を特定できるものはない。Ⅲ層直下の

現地表下120cmでⅣ層が出土した。Ⅳ層はⅣ-1～Ⅳ-4層に分層ができる。Ⅳ-1層は明黄褐色砂質土で、径3mm未満の砂礫を多く含む。Ⅳ-2層は浅黄色砂質土で、径2mmの砂礫を少量混じる。Ⅳ-3層は浅黄色砂質土で径2mm未満の砂礫を混じる。Ⅳ-4層は灰黄色砂礫で径2cm未満の砂礫からなる。Ⅳ層から遺物は出土していない。現地表下190cmまで掘り下げを行った時点で調査を終了した。

11区は理学部講義棟西側に位置する外灯基礎工事地点である（写真128・129）。人力で掘り下げを行い、現地表下135cm、I層直下でⅣ-1層が出土した。Ⅳ-1層は灰黄～浅黄色砂質土で、17cmほど堆積している。Ⅳ-1層直下、現地表下150cmで径2cm未満の黄灰色砂礫からなるⅣ-2層を検出したところで調査を終了した。遺物に関しては、I層から中近世の土師皿底部片などが出土している。

12区は総合科学研究支援センター北東部に位置する花壇基礎工事地点である（写真130）。重機を用いて、現地表下35cmまで掘り下げ、瓦礫を伴ったI層が続いていることを確認した。12区の北に位置する10区では現地表下100cmでⅢ層が出土しており、12区でも同様な状況が予想されることから、発掘停止面とⅢ層との間に約65cmの土層が堆積していることとなる。工事による埋蔵文化財への影響がないと考えられることから、発掘停止面以下の埋蔵文化財に関しては、現地保存することとした。遺物は出土していない。

13区は理学部講義棟西側に位置する花壇・ベンチ基礎工事地点である（写真131）。重機を用いて、現地表下35cmまで掘り下げを行い、瓦礫を伴ったI層が続いていることを確認した。12区の北に位置する10区では現地表下100cmでⅢ層が出土しており、12区でも同様な状況が予想されることから、発掘停止面とⅢ層との間に約65cmの土層が堆積していることとなる。工事による埋蔵文化財への影響がないと考えられることから、発掘停止面以下の埋蔵文化財に関しては、現地保存することとした。遺物は出土していない。

14区は理学部本館南側、理学部講義棟北西部に位置する縁石・ベンチ基礎工事地点である（写真132）。重機を用いて、現地表下33cmまで掘り下げ、I層が続いていることを確認した。以下に埋蔵文化財に関しては、現地保存することとした。出土遺物はない。

15・16区は理学部本館南側に位置するバーゴラ基礎工事地点である（写真133・134）。重機を用いて、現地表下31cmまで掘り下げ、瓦礫を伴ったI層が続いていることを確認した。工事による影響は、掘り下げ停止面以下に及ばないことから、埋蔵文化財に関しては、現地保存することとした。出土遺物はない。



写真118 00907調査4～23区調査前の状況（北東から）



写真119 00907調査4区完掘状況（南東から）



写真120 00907調査5区東半部完掘状況（北西から）



写真121 00907調査5区西半部完掘状況（南西から）



写真122 00907調査6区完掘状況（北から）

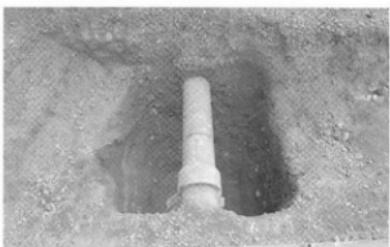


写真123 00907調査7区完掘状況（北から）



写真124 00907調査8区完掘状況（北から）



写真125 00907調査9区完掘状況（西から）



写真126 00907調査10区遠景（南東から）



写真127 00907調査10区完掘状況（西から）



写真128 00907調査11区遠景（南東から）



写真129 00907調査11区完掘状況（南から）



写真130 00907調査12区完掘状況（南から）



写真131 00907調査13区完掘状況（北から）



写真132 00907調査14区完掘状況（南東から）



写真133 00907調査15区完掘状況（西から）



写真134 00907調査16区完掘状況（西から）



写真135 00907調査17区完掘状況（南から）



写真136 00907調査18・19区完掘状況（東から）



写真137 00907調査20・21区完掘状況（東から）



写真138 00907調査22区完掘状況（北西から）



写真139 00907調査23区完掘状況（南東から）

17区は理学部本館南側に位置する（写真135）。同地點には、現在、フェニックスが植樹されており、工事では、フェニックスの植栽枠を設置する計画である。重機を用いてフェニックスの周囲を、現地表下26cmまで掘り下げ、瓦礫を伴ったⅠ層が続いていることを確認した。工事による掘削は、掘り下げ停止面以下まで及ばないことから、以下の埋蔵文化財に関しては、現地保存することとした。遺物は出土していない。

18区・20区は理学部本館南側に位置するベンチ基礎工事地点である（写真136・137）。重機を用いて、現

地表下33cmまで掘り下げを行い、瓦礫を伴ったⅠ層が続いていることを確認した。工事による影響は、掘り下げ停止面以下まで及ばないことから、以下の埋蔵文化財に関しては、現地保存することとした。遺物は出土していない。

19区・21区は理学部本館南側に位置する緑石基礎工事地点である（写真136・137）。重機を用いて、現地表下33cmまで掘り下げ、瓦礫を伴ったⅠ層が続いていることを確認した。工事による影響は、掘り下げ停止面以下まで及ばないことから、以下の埋蔵文化財に

しては、現地保存することとした。遺物は出土していない。

22区は総合科学研究支援センター北東部に位置する緑石基礎工事地点である（写真138）。重機を用いて、現地表下33cmまで掘り下げを行い、瓦礫を伴ったI層が続いていることを確認した。工事による影響は、掘り下げ停止面以下まで及ばないことから、以下の埋蔵文化財に関しては、現地保存することとした。遺物は出土していない。

23区は理学部本館南西部に位置する緑石基礎工事地点である（写真139）。重機を用いて、現地表下33cmまで掘り下げを行い、瓦礫を伴ったI層が続いていることを確認した。工事による影響は、掘り下げ停止面以下まで及ばないことから、以下の埋蔵文化財に関しては、現地保存することとした。遺物は出土していない。

3まとめ

本調査における最も大きな成果は、理学部構内南西部における遺跡データを得ることができたことである。これまで理学部構内北部や東部における調査は多数実施されていたが、南西部における調査件数は少なく、詳細なデータは限られていた。今回の調査により、理学部構内北部や東部同様、縄文時代～中世の遺跡が展開していることを明らかにすることができた。

なお、本調査では、理学部構内南半部の23地点に調査区を設けた。23地点のうち15地点は表土層内における掘り下げに止め、以下の埋蔵文化財に関しては現地保存し、残りの8地点についてのみ記録保存を行った。今後、現地保存を行っている地点で掘削工事を行う際には、発掘調査などの対応が求められる。（三吉）

00909（樽味団地）植物工場他新営工事に伴う調査

調査地點 松山市樽味3丁目3番、4番、5番

愛媛大学樽味団地

調査面積 49.7m²

調査期間 2010年1月6日～2010年1月8日

調査の種別 試掘調査

調査担当 田崎博之

調査補助 宮崎直栄・濱田美加

依頼文書 農学部長発事務連絡

（平成21年12月1日付）

1 調査にいたる経緯

農学部長より、樽味団地において植物工場新営に伴い温室・研修棟等を新設する工事計画が報告され、試掘調査を実施することとなった（図23）。

2 調査の記録

調査に当たっては、周辺の既往の調査結果を踏まえ、1～9トレンチを設定した。1～7トレンチは温室新営、8トレンチは研修棟新営、9トレンチは温室建設に伴い移設される附属高校畜舎新営工事に対応する調査地点である（図23）。

（1）1トレンチ（図24-1、写真140）

植物工場温室が新営される東側では、樽味遺跡5・

6次調査で中世の集落関連の遺構が確認されており、その西側への広がりを確認するために設定した調査区である。附属高校動物飼育室実習室（畜舎）建物北東側に位置する。現地表下60cmまで造成土層（樽味団地全域で設定している基本層序I層）を重機で掘り下げたところ、トレンチ中央にL字形に埋設された配管があらわれたため、調査を中止せざるをえなかった。

（2）2トレンチ（図25-1、写真141～147）

1トレンチで確認された配管を避け、動物飼育室実習室（畜舎）建物の北側に設定した長さ18.9m、幅0.8mの調査区である。重機で造成土層（基本層序I層）を掘り下げたが、トレンチ東端から3mほどまでは現地表下60cmで基本層序Ⅲ層である黒褐色シルト質土層、東端から7mまでは現地表下80cmで基本層序IV層上部の淡黄色シルト層、それ以西のトレンチ西半部では現地表下80cmでIV層下部にあたる砂礫が多く混じる明黄褐色粘質シルト層があらわれた。トレンチ東半部では、Ⅲ層及びIV層に掘り込まれた砂礫混じりの褐灰色シルト質土、淡黄色シルト質土の小塊が混じる黒褐色シルト質土、褐灰色シルト質土と淡黄色シルト質土の小塊が混じる黒褐色シルト質土、クロボク土混じりの黒褐色シルト質土を埋土とする小型土壙や小穴を確認できた。こうした遺構の埋土の特徴は、周辺での既

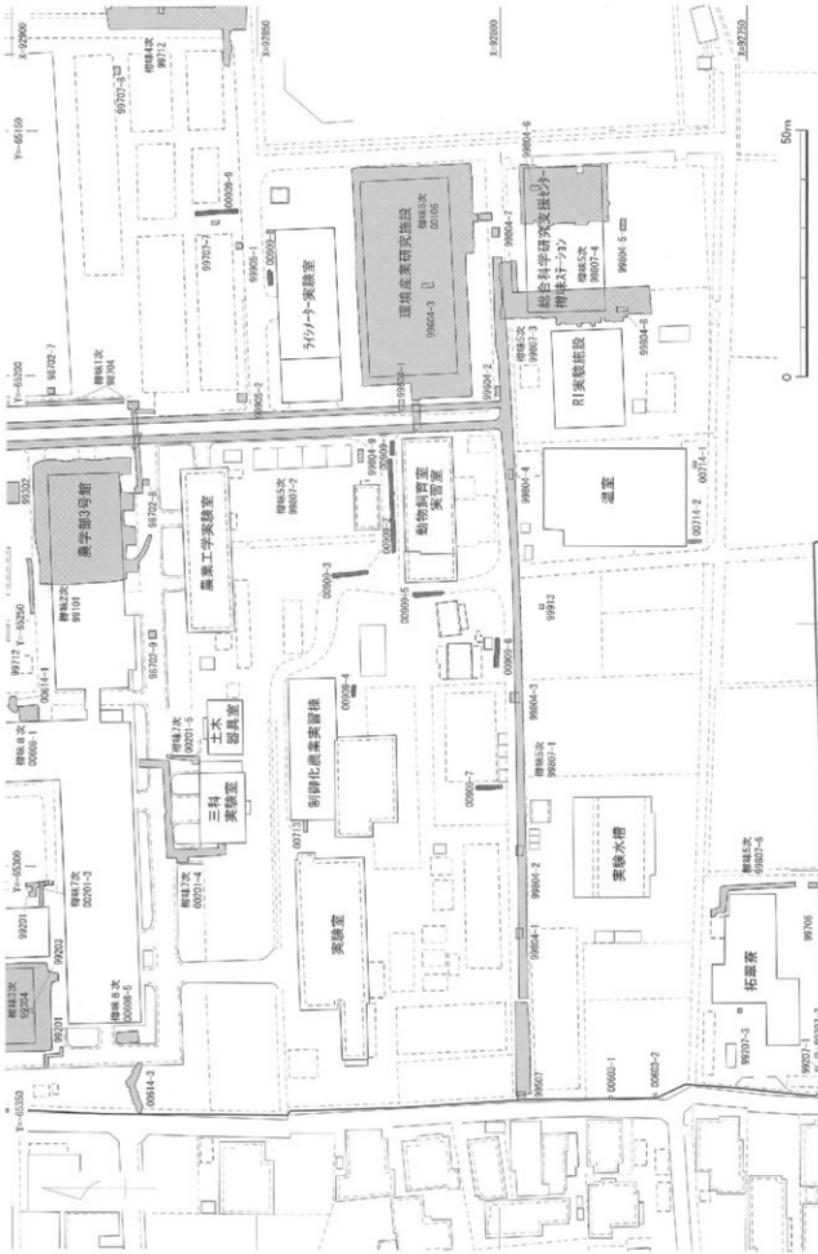


图23 00909调查地点位置图 (缩尺1 / 1000)

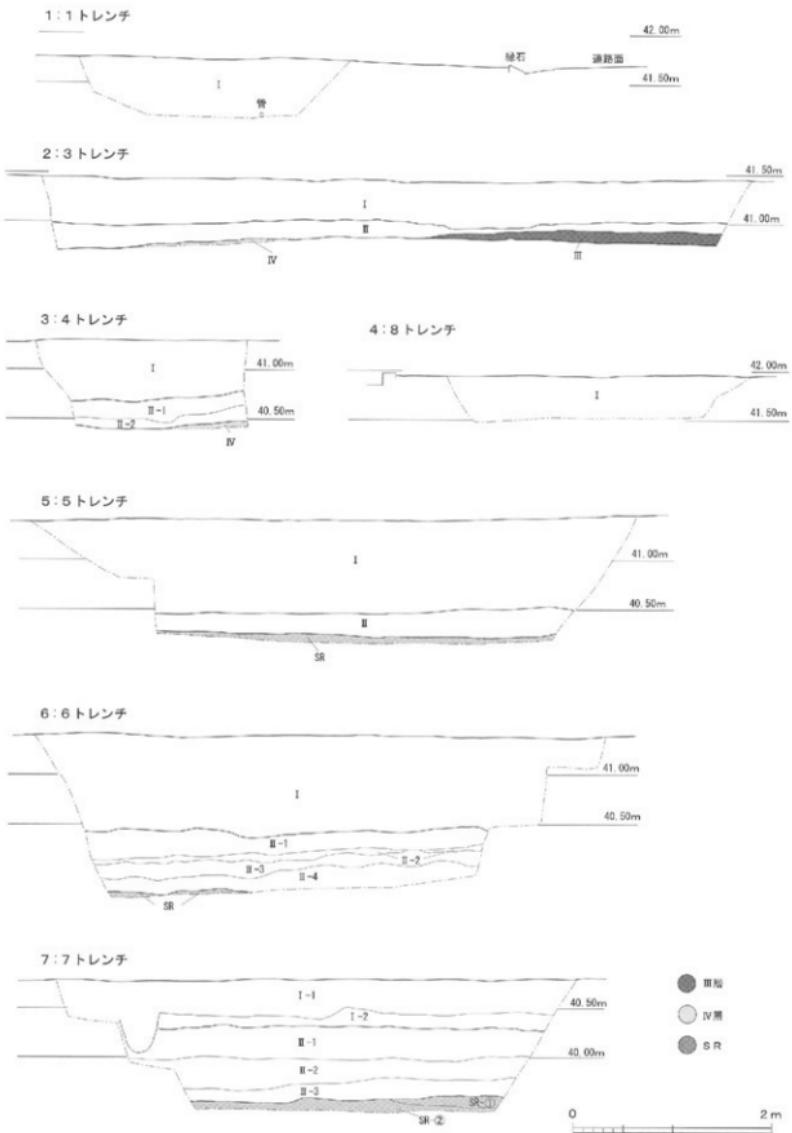


図24 00909調査1・3~8トレンチ土層断面図（縮尺1/50）

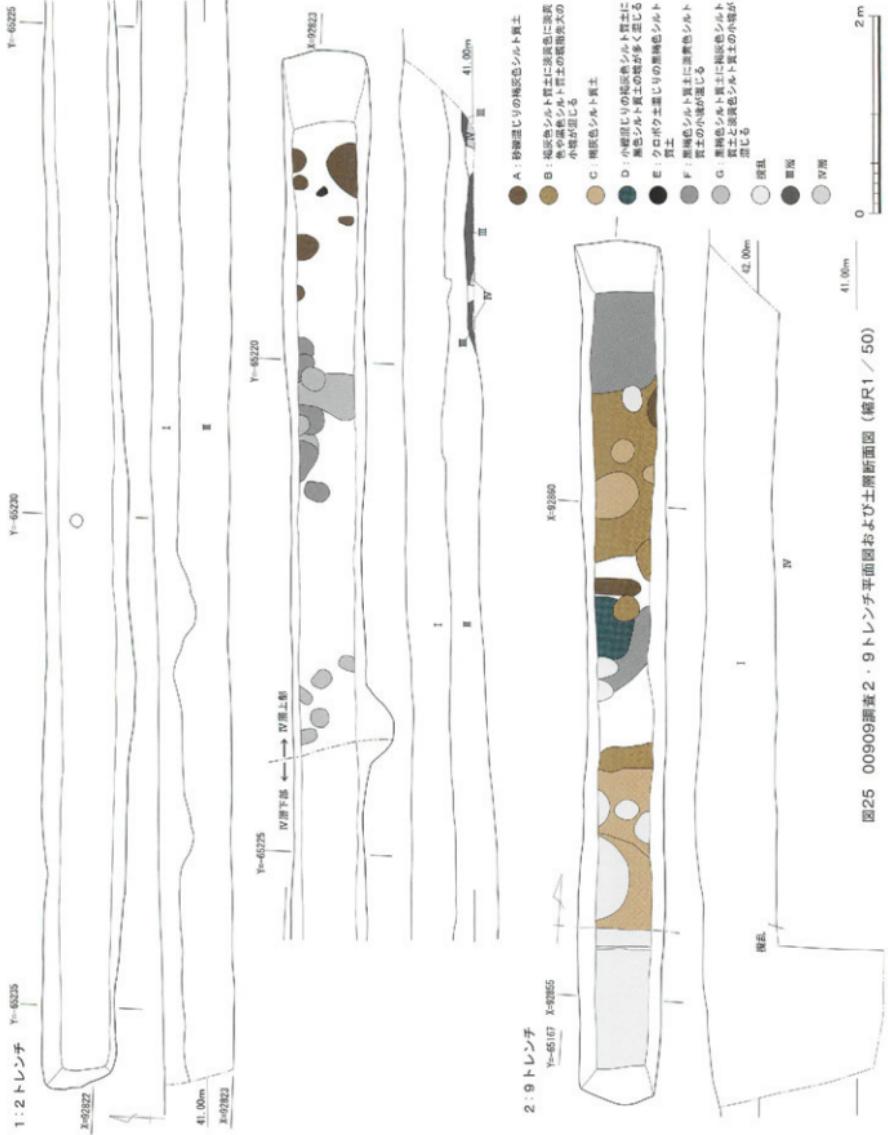


図25 00909調査2・9トレシ平面上および土壌断面図（縮尺1／50）



写真140 00909調査1 トレンチ全景(東から)



写真141 00909調査2 トレンチ位置(西から)



写真142 00909調査2 トレンチ東半部遺構検出状況
(東から)



写真143 00909調査2 トレンチ西半部IV層上面遺構
検出状況 (西から)



写真144 00909調査2 トレンチ東端遺構検出状況と
土層断面(南から)



写真145 00909調査2 トレンチ東半部遺構検出状況と
土層断面(南東から)



写真146 00909調査2 トレンチ中央よりの遺構検出状況と
土層断面(南東から)



写真147 00909調査2 トレンチ西端部IV層上面検出状況
(南西から)



写真148 00909調査3 トレンチ全景(南東から)



写真149 00909調査3 トレンチ西壁土層断面(南東から)

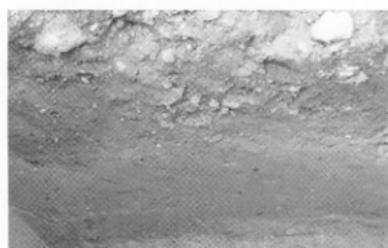


写真150 00909調査3 トレンチ南端西壁土層



写真151 00909調査3 トレンチ北端部西壁土層(南から)

往調査で出土している中世の遺構と共に通する。遺物は出土していないが、埋土の特徴から、当該期の遺構と考えられる。

(3) 3トレント (図24-2、写真148～151)

動物飼育室実習室建物の北西側に設定した長さ2.2m、幅0.8mの調査区である。重機で造成土層（I層）と梯味団地が造成される以前の水田層である基本層序II層を掘り下げた。トレント北半部では現地表下55cmでⅢ層、南半部では現地表下65cmでIV層が出土した。遺物は出土していない。

(4) 4トレント (図24-3、写真152・153)

制御化農業実習棟の南東側に位置する調査区で、長さ2.1m、幅0.8mを測る。現地表下55cmでⅡ層、83～90cmでIV層があらわされた。Ⅱ層は水田耕作土であるⅡ-1層、床土層のⅡ-2層に分層できる。4トレントで確認したIV層は、明褐色シルト層で、IV層でも上部に当たる。遺物は出土していない。

(5) 5トレント (図24-5、写真154～156)

動物飼育室実習室建物の西側に設定した長さ6.1m、幅0.8mの調査区である。現地表下90～93cmで、造成土である1層の直下で砂礫混じりの褐灰色シルト質粘質土層のII層があらわされた。このII層は、土質・土色ともに3トレントII層に近似する。さらに、II層を掘り下げると、現地表下115～120cmで径1～2cmから拳大の扁平な円礫が混じる褐灰色の砂礫層が出土した。砂礫層を5～10cm掘り下げたところ、中世の土器土鍋の脚部や須恵質土器の脚部の破片が出土し、トレント北端から2mほどで、南に向かって砂礫層が落ち込むことを確認できた。この砂礫層は、南側に近接する梯味跡5次調査Ⅰf区で出土している自然流路を埋積する一連の堆積物と判断できる。

(6) 6トレント (図24-6、写真157～159)

5トレントから南西に15mほど離れた地点に設定された長さ5.8m、幅0.8mの調査区である。この地点は南側の道路部分より65cmほど盛土されている。現地表下100cmまで造成土の1層がつづく。I層の直下にはII層が出土した。II層は、褐灰色砂質シルト質土のII-1層、灰褐色細砂のラミナがみられる明褐色細砂層のII-2層、淡黄色のシルト質土の小塊が点々

と混じる灰黃褐色粘質シルト質土のII-3層、粗砂や小礫が多く混じる灰黃褐色粘質シルト質土のII-4層から構成される。II-1・3・4層は水田耕作土層、II-2層は河川氾濫で運ばれた堆積物である。さらにII層を掘り下げると、現地表下140～155cmで拳大の円礫が混じる褐灰色砂礫層が出土した。遺物は出土していないが、5トレントや梯味跡5次調査Ⅰf区で出土した自然流路を埋積する一連の堆積物と判断できる。

(7) 7トレント (図24-7、写真160～163)

6トレントから西側へ24mほど離れた位置に設定した長さ5.3m、幅0.8mの調査区である。現地表下45～50cmまで、盛土された真砂土のI-1層と暗灰色砂質シルト質土のI-2層がつづく。I-2層は水田耕作土。I層の直下では、マンガンの沈着した灰色品質シルト質土のII-1層、砂礫混じりの灰色シルト質土のII-2層、砂礫混じりの暗灰色シルト質土のII-3層があらわされた。さらにII層を掘り下げると、現地表下120cmで粗砂と小礫からなる暗灰色砂礫層を確認した。中世の土師器の胸部破片などが出土し、5・6トレントと同じく、梯味跡5次調査Ⅰf区で確認された自然流路を埋積する一連の堆積物と判断できる。また、北側部分には、砂礫層上部に、II-3層が混じる②層がみられる。

(8) 8トレント (図24-4、写真164・165)

ライシメーター実験室建物の北側に設定した長さ3m、幅0.8mの調査区である。現地表下45cmまで掘り下げたところ、トレント中央に既設配管があらわれ、調査を中止せざるをえなかった。

(9) 9トレント (図25-2、写真166～169)

ライシメーター実験室建物の北東側に設定した長さ8.7m、幅0.8mの調査区である。現地表下80cmでIV層があらわれ、淡黄色シルト質土の小塊が混じる褐灰色シルト質土、褐灰色シルト質土、砂礫混じりの褐灰色シルト質土、淡黄色に淡黄色や黒色シルト質土の親指先大の小塊が混じる褐灰色シルト質土を埋土とする大型～小型の土壤や小穴を確認できた。こうした遺構の埋土の特徴は、周辺での既往調査で出土している中世の遺構と共に通する。遺物は出土していないが、埋土の特徴から、当該期の遺構と考えられる。また、トレント



写真152 00909調査4 トレンチ位置(北東から)



写真153 00909調査4 トレンチ土層断面(南東から)



写真154 00909調査5 トレンチ位置(北東から)



写真155 00909調査5 トレンチ土層断面(南東から)



写真156 00909調査5 トレンチ北半部土層断面(南東から)



写真157 00909調査6 トレンチ位置(東から)



写真158 00909調査6 トレンチ全景(東から)

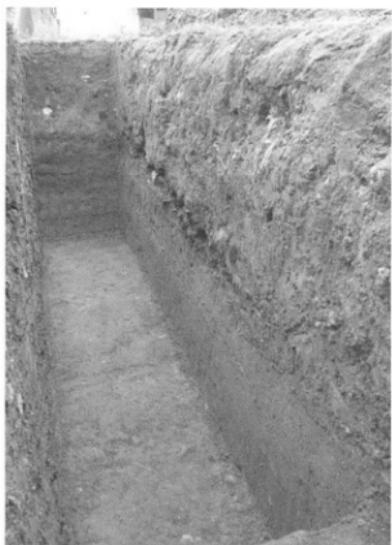


写真159 00909調査6 トレンチ北壁土層断面(南東から)



写真160 00909調査7 トレンチ位置(南から)



写真161 00909調査7 トレンチ西壁土層断面(南東から)



写真162 00909調査7 トレンチ全景(南から)



写真163 00909調査7 トレンチ北半部西壁土層(南東から)



写真164 00909調査8 トレンチ位置(西から)



写真165 00909調査8 トレンチ全景(北西から)



写真166 00909調査9 トレンチ位置(南東から)



写真167 00909調査9 トレンチ西壁土層(北東から)



写真168 00909調査9 トレンチ全景(南から)



写真169 00909調査9 トレンチ北半～中央部遺構検出状況

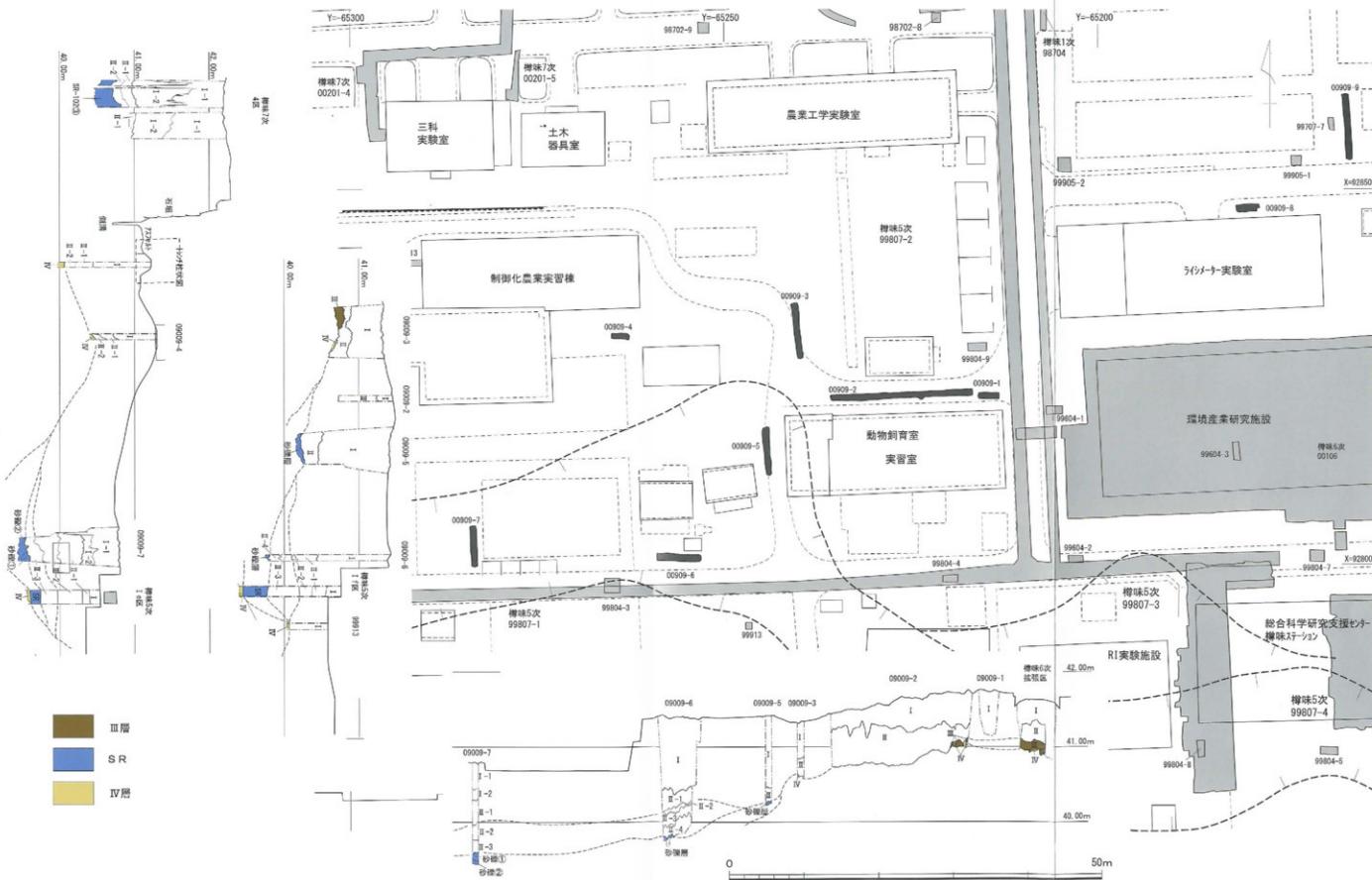


図26 梅味団地南半部における自然流路 (縮尺1 / 500)

の南端から1.8mまでは、既設の高圧電線管の埋設のために、現地表下1.85mまで搅乱が及んでいる。

3 調査のまとめ（図26）

今回の調査では、2トレンチ東半部と9トレンチで中世と考えられる大小の土壙や小穴が出土した。近接する樽味遺跡5・6次調査で確認されている中世の集落域にあたるものと考えられる。また、5~7トレン

チでは、樽味遺跡5次調査I f区で確認された自然道路の広がりを確認できた。遺構・遺物が出土していない2トレンチ西半部、3・4トレンチ周辺は、自然道路の影響が集落域へ及ばないバッファーゾーン的な空間としての機能が考えられる。（田崎）

00910（城北団地）理学部構内外灯設備工事に伴う調査

調査地点 松山市文京町2番5号

愛媛大学城北団地

調査面積 2.2m²

調査期間 2010年1月21日~1月22日

調査の種別 立会調査

調査担当 三吉秀充

監査補助 宮崎直栄・濱田美加

依頼文書 施設基盤部長発事務連絡

（平成21年11月27日付）

1 調査にいたる経緯

文京遺跡41次調査に着手した11月下旬、施設基盤部から、総合研究棟北側駐車場内設置の外灯移設設計画が示された。松山市教育委員会を通じて愛媛県教育委員会へ土木工事等の届出書の提出を行った結果、同教育委員会より工事立会の指示があり、調査室では、調査員による工事立会を実施することとした。なお、外灯基礎工事では現地表下1.3mまで掘削を行う予定であり、埋蔵文化財へ影響が及ぶことが予想されたため、小規模調査として対応した。

2 調査の記録（図27、写真170・171）

工事地点は、総合研究棟北側の花壇内にあたる。重機を用いた掘り下げが困難であることから、人力で掘り下げを行った。現地表下65cmまで瓦礫を伴ったI層が続き、直下でIII層が出土した。III層はIII-1層~III-5層に分層できる。III-1層は黄褐色シルトで、径2mm

の砂礫を少量含んでいる。約15cm堆積する。III-2層は灰黄色砂質土で、黄褐色シルトのブロックを少量混じる。約45cmの堆積である。III-3層は、明黄褐色シルトで西壁近くのみに堆積する。III-4層は灰黄褐色シルトで、約15cm堆積する。III-5層は灰黄褐色砂質シルトで、

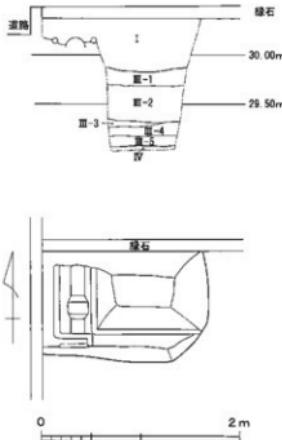


図27 00910調査区平面図・土層断面図（縮尺1/50）



写真170 00910調査調査区遠景（北から）



写真171 00910調査完掘状況（南から）

径2mmの砂礫を混じる。層厚は約10cmである。Ⅲ層直下の現地表下142cmでⅣ層が出土した。Ⅳ層は、明黄褐色シルトである。調査では、現地表下145cmまで掘り下げを行い、外灯基礎工事によって埋蔵文化財へ影響がないことを確認して調査を終了した。

出土遺物に関しては、Ⅲ層から土器の小片が少量出土している。中でもⅢ-4層から突帯文土器の深鉢胴部片などが出土している。

区であったが、縄文時代晚期から弥生時代の遺物包含層であるⅢ層と縄文時代後期以前の遺物包含層であるⅣ層を確認できた。特に、Ⅲ層中から縄文時代晚期に位置づけられる突帯文土器の深鉢胴部片が出土している点は注目される。今回の調査区の西側で実施した文京遺跡21次調査や35次調査3区では、縄文時代晚期～弥生時代初頭の土器だまりを確認しており、今回の調査で確認できたⅢ層は、この土器だまりの一部と考えられる。

(三吉)

3まとめ

今回の調査区は、街灯移設工事に伴う小規模な調査

00911 (城北団地) 60周年記念会館（仮称）新営その他工事に伴う調査 (文京遺跡42次調査)

調査地点 松山市文京町3番

愛媛大学城北団地

調査面積 1063.5m²

調査期間 2010年1月25日～3月12日

調査の種別 本格調査

調査担当 三吉秀充・田崎博之

調査補助 宮崎直栄・濱田美加

依頼文書 施設基盤部長発事務連絡

(平成21年11月27日付)

1 調査にいたる経緯

2009年10月中旬、60周年記念建物（仮称）新営その

他工事に伴う文京遺跡40次調査が終了した。直後に、施設基盤部より関連事業として60周年記念会館ならびに記念講堂周辺の環境整備工事に伴う発掘調査の依頼があった。その後、施設基盤部において具体的な工事計画が作成され、埋蔵文化財調査室に工事内容が示されたのは、11月下旬である。この工事計画に基づいて、埋蔵文化財調査室と施設基盤部との間で、工事内容を確認すると同時にできるだけ埋蔵文化財に影響が及ばないように協議した。また、工事計画では発掘調査地点は、60周年記念会館（仮称）新営建物ならびに記念講堂改修工事地に隣接し、なおかつ建築作業・解体作業と同時進行で発掘調査を実施する計画であったこと

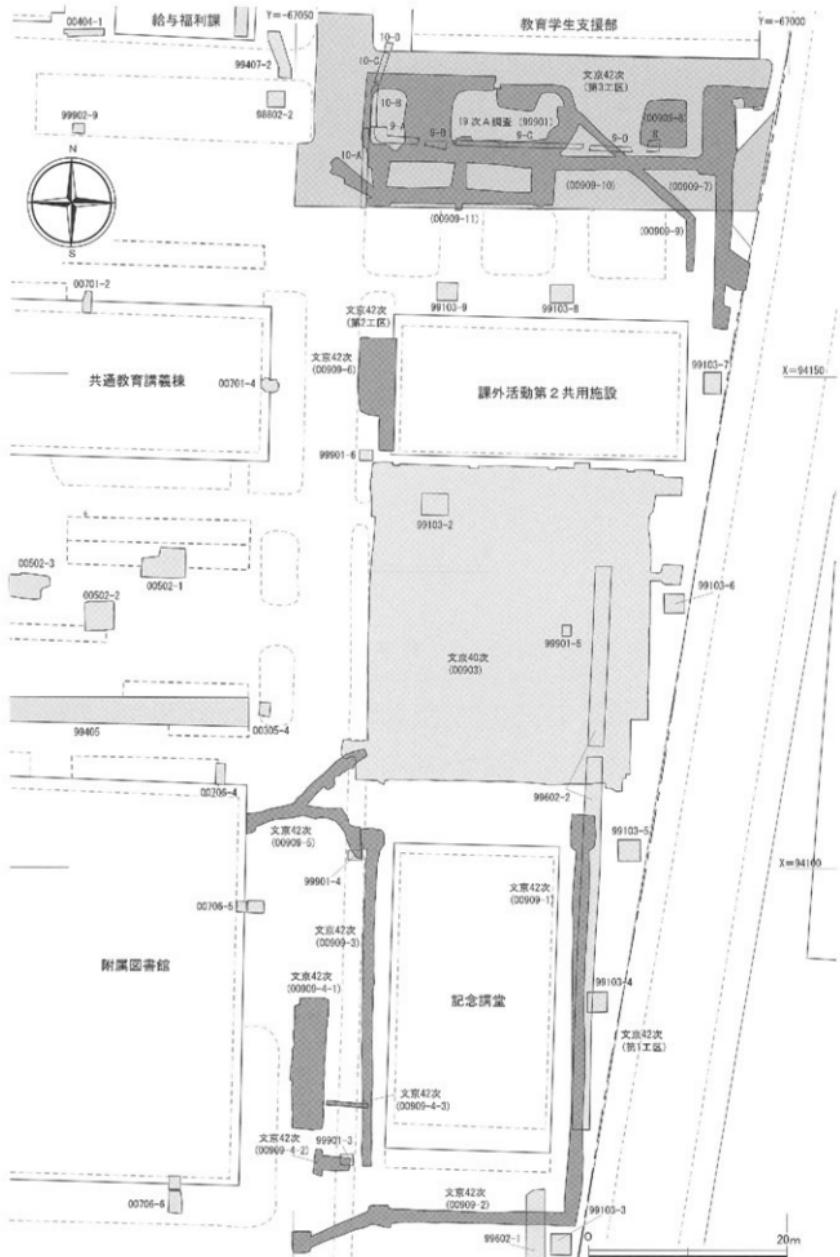


図28 00911調査地点配置図（縮尺1／500）

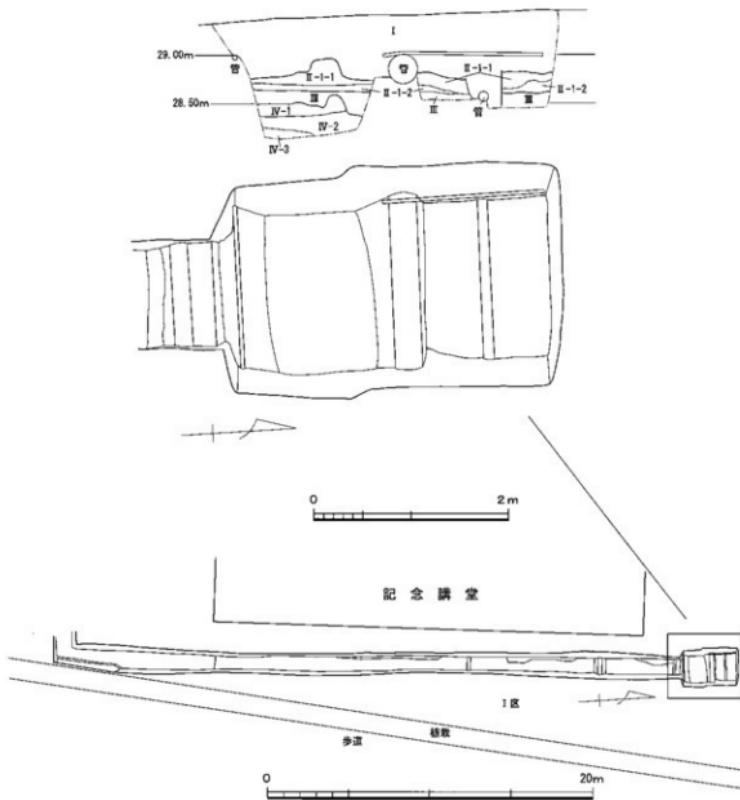


図29 00911調査I区平面図・土層断面図(縮尺1/300・1/50)

から、発掘調査時における適正なる安全衛生環境の維持を施設基盤部に要望した。これら学内における協議を経て、土木工事等の届出書を提出したのは、12月上旬である。

調査室では、当初調査員1名での調査体制を予定していた。しかし、調査着手直前になり、工期との関係により、調査室が要望した調査期間を確保できないことが明らかになった。そこで、急速調査員2名からなる調査体制で、1月25日からの発掘調査に対応した。

2 調査の記録

(1) 基本層序

今回の調査では、城北団地で設定している基本層序I～IV層を確認した。各基本層序の特徴は以下の通りである。

I層は表土層である。

II層は、造成以前の灰色系の近世～近代の水田層で、下部には鉄分・マンガンの沈着する床土層がみられる。

III層は、弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含する黒色～暗褐色系の土層である。42次調査区における

Ⅲ層は、自然流路内の堆積層の一部と考えられる。

Ⅳ層は、黄褐色系のシルト～砂質土層である。縄文時代の遺構・遺物を包含する。

(2) 調査の概要

調査地点は、第1工区～第3工区からなる（図28）。第1工区は記念講堂周辺、第2工区は60周年記念会館（仮称）新営建物周辺、第3工区は課外活動第2共用施設北側周辺である。発掘調査は、工期の都合上、第1工区、第2工区、第3工区の順に行った。

① 第1工区

第1工区は、I区～V区からなる。

(I区)（図29、写真172・173）

I区は記念講堂東側に位置する全長約38m、幅約1.4mの管路部分の調査区と北端部に設けた18×2.2mの樹部分の調査区である。北端部の樹部分から調査を開始したが、東西方向に走る管路部分が見つかったため、現地にて計画を変更し、樹部分を南側にスライドさせたため、樹部分の調査区は最終的に3.5m×2.2mとなつた。樹部分と管路部分とにわけて報告を行う。

管路部分の大半は、文京遺跡15次調査（調査番号99602）2トレンチ部分にある。現地表下67cmまで、重機による掘り下げを行い、表土層であるⅠ層ならびに近現代の水田層であるⅡ層が統一していることを確認した。北端の樹部分における土層堆積状況から、基本層序Ⅲ層との間に10cm以上の土層があることを確認して、以下を現地保存することとした。

樹部分は、基本層序Ⅱ層まで重機を用いて掘り下げを行った後、人力で掘り下げを行った。樹部分の北側は、工事による掘削が及ばないため、南側のみ掘り下げを行った。現地表下約80cmで、基本層序Ⅲ層が出土した。Ⅲ層は、暗褐色砂質土で、やや灰色みをおび、径2～3mmの砂礫が多く含んでいる。Ⅲ層直下でⅣ層が出土した。Ⅳ層は、Ⅳ-1～Ⅳ-3層に分層できる。Ⅳ-1層は、褐色砂質シルト層。径4mm未満の砂礫を少量含んでいる。縄文土器片が1点出土している。Ⅳ-2層は、にぶい褐色砂礫層で径5mm未満の砂礫が混じる。Ⅳ-3層は、灰黃褐色砂礫からなる。現地表下120cmまで掘り下げを行い、調査を終了した。

(II区)（図30、写真174～177）

Ⅱ区は記念講堂南側に位置する全長約45m、幅約1mの調査区である。調査区の西端と中央部には、約2m×2.2mの樹設置工事地点がある。調査区中央部の

樹部を境として、調査区東側、調査区西側とし、中央部樹部、西端樹部と順に報告を行う。

調査区東側は全長約35mの管路部分である。重機を用いて現地表下67cmまで掘り下げを行った。調査区中央部樹部の東壁において、中世の自然流路であるSR-1まで約10cmの間層があることを確認し、調査区東側に關しては調査を終了した。

中央部樹部では、現地表下70cmで中世の自然流路であるSR-1上面を検出した。SR-1の埋土を約40cm掘り下げた時点で、Ⅳ層を確認すると同時に、SR-1の肩部を検出できた。

中央部樹部以西の管路部ならびに西端樹部では、重機を用いてⅠ・Ⅱ層を掘り下げSR-1を検出した後、人力でSR-1埋土を現地表下約170cmまで掘り下げたが、SR-1の底面を確認できなかった。SR-1埋土は、大きくSR-1層とSR-1層という大きく2つの単位が確認できた。SR-1層は灰黄色砂層と砂礫層の互層堆積層である。SR-1層は暗褐色砂質土層、灰色細砂層、灰黄色粗砂層の互層堆積層である。埋土中から、青磁碗・瓦器碗や土器器・須恵器の小片が多數出土している。

（三吉）

(III区)（図31、写真178・180）

記念講堂南側に位置する全長34.4m、幅0.9～1.1mの調査区で、北端部には20×2.4mの樹部分があり、管路部分は幅0.9～1.1mを測る。北端部の樹部分では、標高28.4mまで掘り下げたところ、多くの既設配管があらわれ、南北隅でⅢ層が出土した。工事関係者と協議し、この深度で樹を設置することとなり、写真撮影及び実測作業を行い、調査を終えることとした。管路部分では、工事によってⅢ層直上まで掘り下げられる計画であった。表土にあたるⅠ層、団地造成以前の水田層であるⅡ層を重機で掘り下げ、標高28.5～28.45mでⅢ層を検出していった。Ⅲ層の直上からは、弥生時代中期後葉の壺の頸部片などが出土している。工事では、Ⅲ層の上面から10cmの客土を行なう計画で、Ⅲ層以下の掘削は行われないことから、写真撮影と土層断面図を作成し調査を終了した。

(IV区)（図32・写真179～183）

記念講堂西側に設けた給排水埋設配管設置工事地点である。Ⅳ-1～3区からなる。

Ⅳ-1区は南北長13m、東西幅3～3.3mの調査区である。重機を用いて、基本層序Ⅰ・Ⅱ層を掘り下げた後、Ⅲ層が出土した。Ⅲ層から人力による掘り下げ作

① 考古文化土剖面

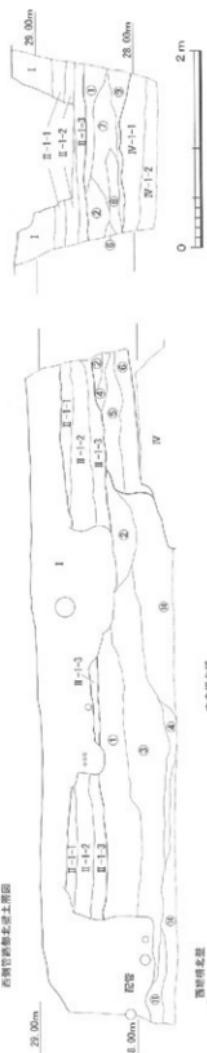
西北部考古土剖面

西北部考古土剖面



西南部考古土剖面

中央地带土剖面



西南部考古土剖面

中央地带土剖面

0 2m

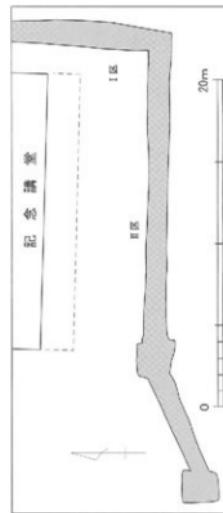
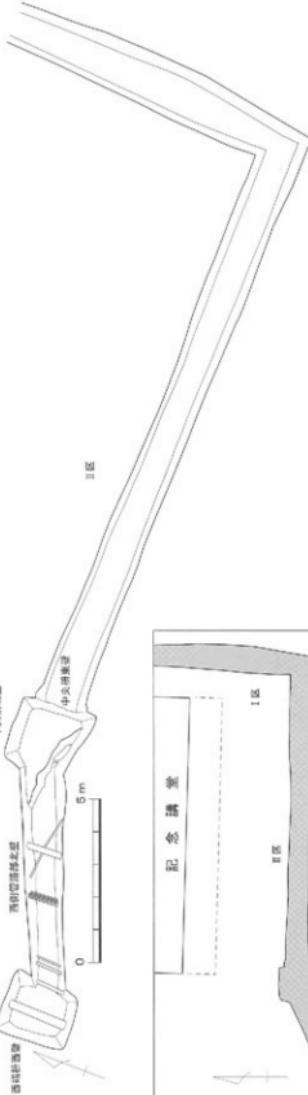


图30 00911调查Ⅰ区平面图、土质断面图（比例尺1/150·1/300·1/500）



写真172 00911調査Ⅰ区完掘状況（北から）



写真173 00911調査Ⅰ区北端部完掘状況（東から）



写真174 00911調査Ⅱ区西半部完掘状況（北東から）



写真175 00911調査Ⅱ区東半部完掘状況（西から）

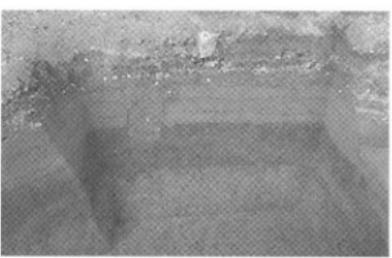


写真176 00911調査Ⅱ区中央樹部北壁土層（南から）

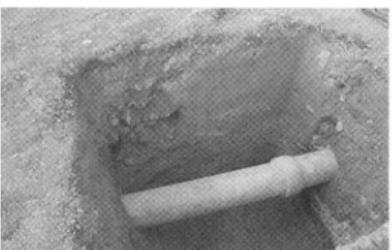


写真177 00911調査Ⅱ区西端樹部西壁土層（東から）



写真178 00911調査Ⅲ区完掘状況（南から）



写真179 00911調査Ⅳ-1区完掘状況（北から）



写真180 00911調査Ⅲ区北端完掘状況（南から）



写真181 00911調査SD-4完掘状況（南東から）



写真182 00911調査SD-3完掘状況（東から）



写真183 00911調査Ⅳ-2区完掘状況（南西から）

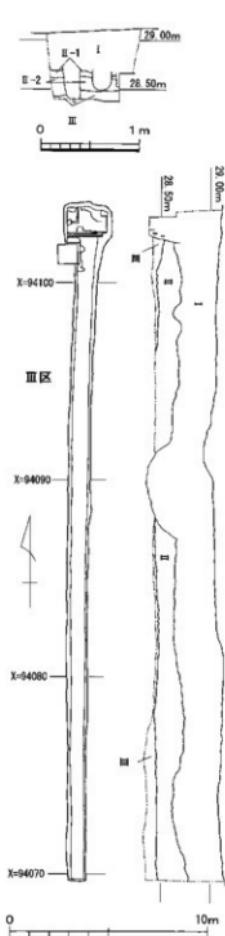


図31 00911調査Ⅲ区平面図・
土層断面図(縮尺1/250・1/50)

業を行い、Ⅲ-3層上面でSD-2、Ⅲ-5層上面でSD-3、IV層上面でSD-4が出土した。

SD-2は東西方向にのびる幅約90cmの溝である。埋土中から土師器小片が出土しているが、詳細な時期を推定できるものではない。

SD-3は東西方向にのびる幅約40cmの溝である。出土遺物はない。

SD-4は幅0.7～1mの溝である。灰色の粗砂・小砾および暗褐色シルトが混じる。出土遺物はない。

IV-2区は東西長3.5m、南北幅1.5mの調査区である。重機を用いて、現地表下54cmまで掘り下げを行い、文京遺跡における基本層序Ⅱ層中であることを確認して、以下を現地保存した。

IV-3区は東西長4.3m、南北幅0.4mの調査区である。重機を用いて、現地表下57cmまで掘り下げを行い、文京遺跡における基本層序Ⅱ層中であることを確認して、以下を現地保存した。
(田崎)

(V区) (図33、写真184)

調査区は附属図書館の北東部、記念講堂北西部に位置する。電気線引き込みに伴う工事部分である。附属図書館側から記念講堂方向と60周年記念建物方向へのびるYの字状の調査区である。調査区中央部ならびに東端部をのぞく調査区の大部分では、既設管路設置時の掘削工事によって遺跡が破壊されていた。調査区中央部ならびに調査区東端部では、現地表下65cmで基本層序Ⅲ層が出土した。工事に伴って遺跡が破壊されるⅢ層を10～15cm掘り下げを行い、工事による遺跡破壊が行われないことを確認して、調査を終了した。Ⅲ層中から中世～近世と考えられる土師器片などが出土している。

②第2工区

第2工区は、VI区である。

(VI区) (図34、写真185)

調査区は、課外活動第2共用施設の西側に設置するグリーンストラップ工事部分が対象である。南北8m、東西約4mにわたり約50cm掘り下げを行った後、グリーンストラップ部分のみ、約40cm掘り下げを行った。さらにグリーンストラップ部分東壁沿いに、幅約20cmの断面トレンチを設け掘り下げを開始した。しかし、Ⅱ層堆積層は堅くしまり、標高27.84mまで掘り下げを行った時点で手掘りによる掘り下げが困難であることから、掘り下げを停止した。工事によって発掘停止面以下の埋蔵文化財への影響がないことを確認し

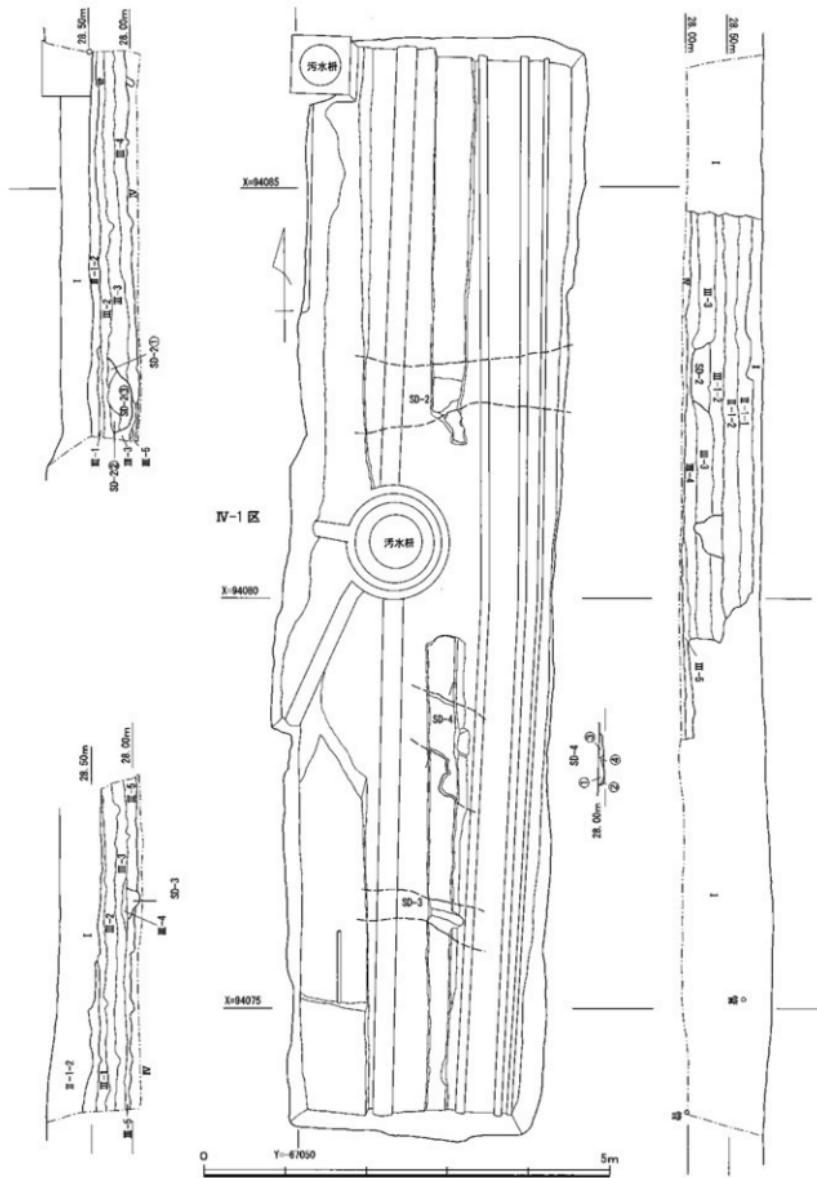


图32 00911调查IV-1区平面图·土层断面图(缩尺1/60)

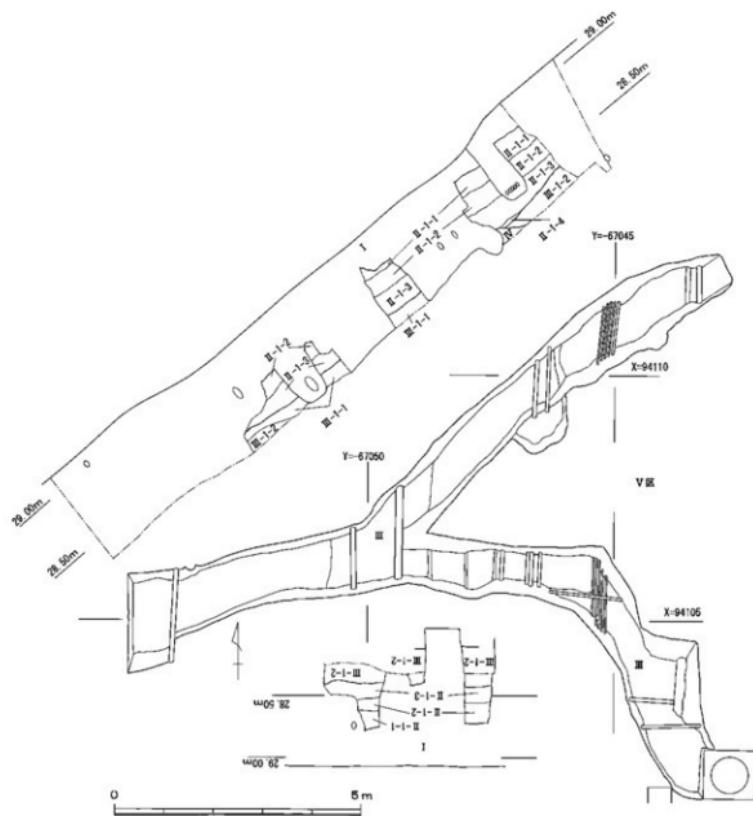


図33 00911調査V区平面図・土層断面図（縮尺1／100・1／40）

て調査を終了した。II層中から、古代～中世の土器器・須恵器片が少量出土している。

③第3工区（図35、写真199）

第3工区は、VII区～XI区である。

重機を用いて、調査区全体を約35cm掘り下げ、基本層序のI層内におさまることを確認して、さらに掘り下げ作業を必要とする以下のVII区～XI区の5地点に開して調査を行った。

（VII区）（図35・36、写真186～189）

第3工区内東側に位置する調査区である。調査区は、南北に街灯基礎工事部分各1カ所とその間を結ぶ電気線引き込み工事部分である。

北側街灯基礎工事部分では、重機を用いて瓦縛を伴ったI層の掘り下げを行い、現地表下80cmで自然流路SR-5が出土した。以下、人力で掘り下げを行い、現地表下115cmで黄褐色砂質土層であるIV層を、現地表

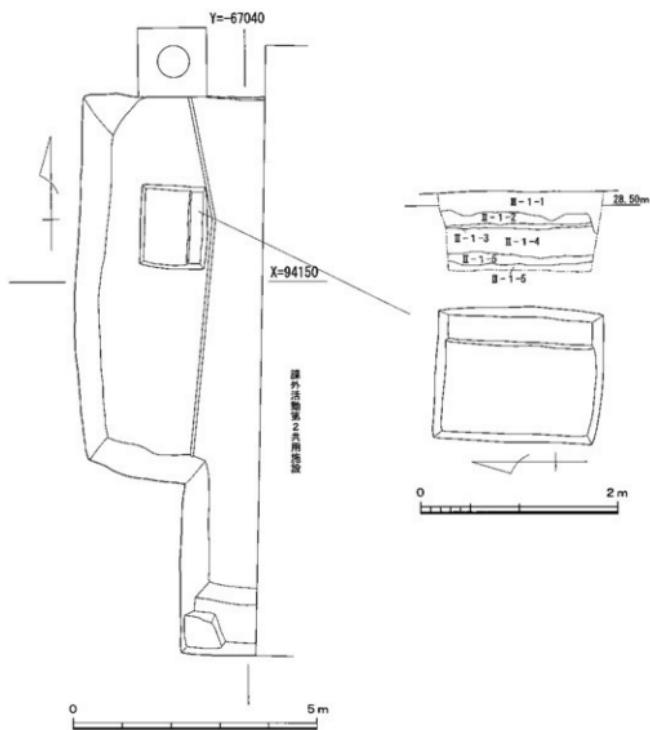


図34 00911調査VI区平面図・土層断面図（縮尺1／100・1／50）

下185cmで径2~10cmの円礫層からなるV層が出土した。調査は、現地表下200cmまで掘り下げた時点で終了した。

南側街灯基礎工事部分では、重機を用いて、表土層ならびに近現代の水田層であるII層を掘り下げ、II層直下の現地表下90cmでSR-5が出土した。SR-5の埋土は、砂礫・粗砂・細砂・シルトの互層堆積層からなり、以下、手掘りで現地表下150cmまで掘り下げを行った後、街灯基礎工事に支障がないことを確認して調査を終了した。

電気引き込み線部分は、全長約22m、北部では幅3m、南部では幅1.6mの調査区である。南側では、重機を用いて現地表下60cmまで掘り下げを行いI層が続

いていることを確認した。北側では、現地表下35~40cmで自然流路SR-5の上面が出土した。以下手掘りで、掘り下げを行った。SR-5埋土の主体は、砂礫層や砂質土層であり、V層との関係が不明であった。そこで、調査区東壁にそって幅20cmで断ち割りトレーナーを設け、掘り下げを行い、北側街灯基礎工事部分で検出したIV層とのつながりを確認し、SR-5埋土内堆積であることを確認した。また、X区と接するV区中央部でも、深掘りを行ったが、既存の掘り返し部分内であり、瓦礫を伴ったI層が続くことから、掘り下げを停止し、調査を終了した。III層中から古代~中世の土師器・須恵器片が出土している。

(V区) (図35・36、写真190・191)

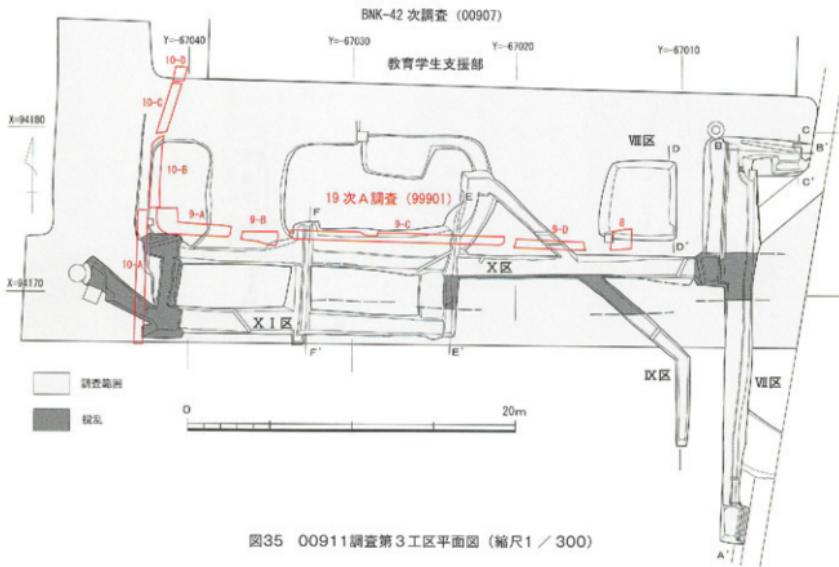


図35 00911調査第3工区平面図（縮尺1／300）

第2共用施設北側周辺の整備に伴って、東側に植えられていたフェニックスを伐採することとなった。フェニックスの根は、広範囲に広がっており、文京造跡42次調査の中で、調査を実施した。伐採するフェニックスは北と南の2地点に植えられている。南側では、伐根に伴う掘り返しが、近現代の水田層である文京造跡基本層Ⅱ層内であることを確認して調査を終了した。北側では、伐根に伴う掘り返しによって、遺跡への影響が予想された。そこで、フェニックスの根を中心として南北5m、東西4.5mの長方形の調査区を設定した。まず、重機を用いて表土層であるⅠ層を掘り下げ、Ⅲ層を検出した。以下、人力でⅢ層の掘り下げを行い、伐根作業が行える現地表下80cmまで掘り下げを行った。Ⅲ層中から弥生土器片などが少量出土している。伐根作業終了後、土砂の埋戻し作業を行い、調査を終了した。

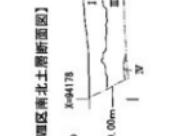
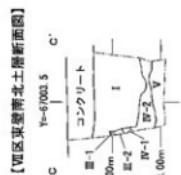
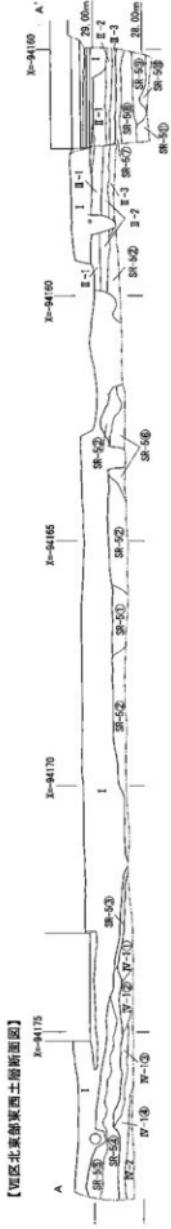
(IX区) (図35・36、写真192・193)

街灯基礎工事部分および電気線引き込み部分である。調査区は全長約22m、幅約0.7mである。IX区の南東部では、重機を用いて現地表下60cmまで掘り下げを行い、瓦礫を伴ったⅠ層が続いていることを確認し

た。北西部では、重機を用いて現地表下約30~40cmまで、Ⅰ層を掘り下げたところで、SR-5の埋土である暗褐色土が出土した。人力で現地表下70cmまで掘り下げを行い、暗褐色土下層で灰色砂質土層を確認した。灰色砂質土層は、遺物を含まないと判断し、工事による埋蔵文化財への影響がないと判断し、調査を終了した。暗褐色土中から弥生土器片や古代の土師器・須恵器片が出土している。

(X区) (図35・36、写真194~197)

第二共用施設北側の側溝工事部分および街灯基礎工事部分である。全長約33m、東部は幅約1.3m、中央部は幅約2.5m、西部は幅約1mである。重機を用いて現地表下約40~45cmまで掘り下げ、SR-5流路内堆積層である暗褐色土が出土した。工事に伴う掘削深度である現地表下約70cmまで掘り下げを行い、暗褐色土層下で遺物を含まない灰色砂質土層を検出した。灰色砂質土層は、遺物を含まず、工事による埋蔵文化財への影響もないと判断し、調査を終了した。X区北西部の暗褐色土中から、弥生土器が折り重なるように多数出土している。ちょうどSR-5の流れが弱まる部分に堆積したものと考えられる。この他に、弥生時代後期~



【I=67023 ライン南北土層断面図】



【V-X1区中央断割り南北断面図】

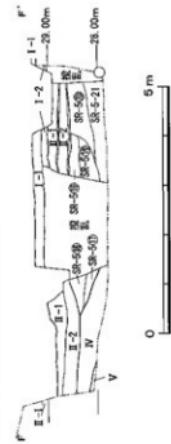


図36 00911調査第3工区土層断面図 (縮尺1/100)



写真184 00911調査V区完掘状況（東から）



写真185 00911調査VI区完掘状況（西から）



写真186 00911調査VII区北端部完掘状況（北から）



写真187 00911調査VII区南端部完掘状況（西から）



写真188 00911調査VII区管路部分完掘状況（南西から）



写真189 00911調査VII区管路部分完掘状況（北西から）



写真190 00911調査VIII区北部完掘状況（西から）



写真191 00911調査VIII区南部完掘状況（北東から）



写真192 00911調査X区完掘状況（北西から）



写真193 00911調査X区完掘状況（北西から）



写真194 00911調査X区西侧管路部分土器集中地点（東から）



写真195 00911調査X区東側断割部土層（北西から）



写真196 00911調査X区西侧断割部土層（北西から）



写真197 00911調査X・XI区完掘状況（西から）



写真198 00911調査X-I区西端部完掘状況（北西から）



写真199 00911調査第3工区完掘状況（東から）

古墳時代前期の土器片が大量に出土している。SR-5は文京遺跡40次調査で検出したSR-008に対応する。

調査区中央部ならびに西側の給排水埋設配管地点で、調査区全体の土層堆積状況を確認するため、南北方向に断ち割り調査を実施した。標高27.80mまで掘り下げを行ったが、SR-5埋土である円礫と粗砂からなる灰色砂礫層が続き、これ以上の掘り下げは困難であると判断し、調査を終了した。

(X I 区) (図35・36、写真197・198)

第二共用施設北側の側溝工事部分と西端の雨水排水管設置に伴う掘削工事部分である。側溝工事部分は、全長約18m、幅約1.5mである。

側溝工事部分は、現地表下約45cmまで掘り下げを行い、基本層序Ⅱ層を検出した。Ⅱ層の下部に存在するSR-5との間に約10cmの土層があることを確認して調査を終了した。

雨水排水管設置工事部分は、全長約5m、幅1.5mの調査区である。調査区全体で、南北方向にのびる多

数の既設配管が出土し、すでに遺跡が破壊されていることを確認して調査を終了した。

3 調査のまとめ

本調査では、I区～X I区で調査を行った。調査で出土した遺構は、中世の自然流路であるSR-1、古代の溝であるSD-2～4、古代の自然流路であるSR-5の5遺構である。特にSR-5は、文京遺跡40次調査で出土したSR-008と同一流路と考えられ、今回の調査ではその北端部を確定することができた。また、出土遺物中には、弥生時代後期～古墳時代前期の土器片が出土しており、流路の上流域周辺では、当該期の遺構が展開していると予想される。

なお、調査では、工事による埋蔵文化財への影響が直接及ぼない地点に関して現地保存を行っている地点もある。今後、現地保存を行っている地点で掘削工事を行う際には、発掘調査などの必要な対応が求められる。

(三吉)

00912 (持田団地) 給水設備改修工事に伴う調査

(持田団地構内遺跡 3次調査)

調査地点 松山市持田町1丁目860番

愛媛大学持田団地

調査面積 85.5m²

調査期間 2010年2月13日～2月15日

調査の種別 本格調査

調査担当 田崎博之

調査補助 宮崎直栄・濱田美加

依頼文書 施設基盤部長発事務連絡

(平成22年1月5日付)

1 調査にいたる経緯

2010年1月、施設基盤部より、持田団地構内における給水設備改修工事計画が示された。周辺における調査の結果から、埋蔵文化財への影響が予想されたため、施設基盤部と埋蔵文化財調査室との間で協議し、掘削深度を浅くするなどの対応を行った。その結果、工事計画は、①受水槽基礎設置に伴う掘削工事(深さ24cm)、②フェンス基礎設置に伴う掘削工事(深さ40cm)、③

給排水・電気配管設置に伴う掘削工事(深さ40cm)となった。これを受けて、土木工事等の届出書の提出を行った結果、愛媛県教育委員会より工事地点の大部分において発掘調査が必要との指示があった。そこで所要の手続きを行った後、2月13日～15日に発掘調査を実施した。

2 調査の記録 (図37、写真200～203)

重機を用いて、現地表下約60cmまで掘り下げを行い、持田団地構内遺跡基本層序Ⅰ層内であることを確認した。工事による埋蔵文化財への影響は、掘り下げ停止面以下に及ばないことから、以下の埋蔵文化財に関しては、現地保存することとした。

3 調査のまとめ

本調査では、遺跡保護の観点から現地表下60cm以下の埋蔵文化財に関して現地保存とした。持田団地構内遺跡1次調査・2次調査地点では、近世以前の水田が



写真200 00912調査調査区遠景（北西から）



写真201 00912調査調査区全景（西から）

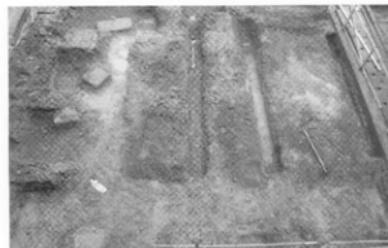


写真202 00912調査調査区全景（南から）



写真203 00912調査調査区北東部（西から）

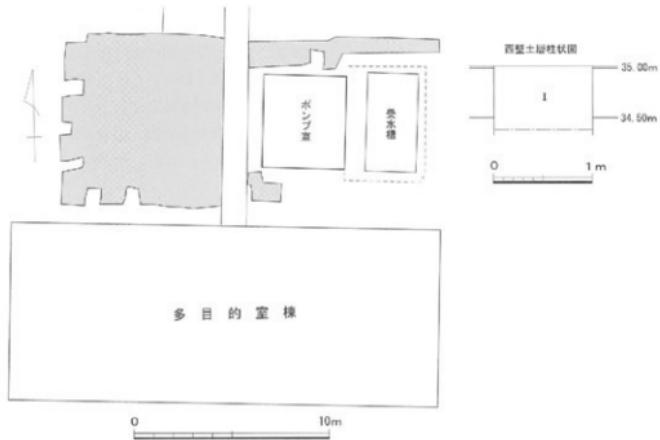


図37 00912調査区平面図・土層柱状図（縮尺1／250・1／50）

出土し、埋蔵文化財の存在が知られている。今後、現地保存地点を含めた周辺地域における掘削を伴った開

発を実施する際には、発掘調査等の対応が必要である。
(三吉)

00913 (城北団地) 理学部構内カーゲート取設工事に伴う調査 (文京遺跡43次調査)

調査地點 松山市文京町2番5号

愛媛大学城北団地

調査面積 31m²

調査期間 2010年3月8日～3月19日

調査の種別 本格調査

調査担当 田崎博之

調査補助 宮崎直栄・濱田美加

依頼文書 施設基盤部長発事務連絡

(平成21年12月18日付)

1 調査にいたる経緯

2009年12月、施設基盤部から理学部構内西側におけるカーゲート取設工事計画が提示された。工事内容は、カーゲート基礎工事ならびに電気配管設置に伴って現地表下35cmまで掘削工事を行うという計画であった。12月下旬に松山市教育委員会を通じて愛媛県教育委員会に土木工事等の届出を行った結果、2010年1月、愛媛県教育委員会よりカーゲート入り口部分（A区）と出口部分（B区）に関して、発掘調査が必要であるとの指示があった。これを受けて、発掘調査届を提出した後、2010年3月8日にB区、3月18・19日にA区の発掘調査を行った。



写真204 00913調査A区完掘状況（北東から）

2 調査の記録（図38、写真204・205）

(1) 調査の概要

① A区

重機を用いて現地表下35cmまで掘り下げを行い、調査区内全体が文京遺跡基本層序Ⅰ層内であることを確認した。工事による埋蔵文化財への影響は、掘り下げ停止面以下に及ばないことから、以下の埋蔵文化財に関しては、現地保存することとした。

② B区

調査地点は、文京遺跡8次調査Ⅲ区内にあたり、重機を用いて現地表下35cmまでの掘り下げを行い、文京遺跡基本層序Ⅰ層内であることを確認した。

(2) 出土遺物

A区、B区ともに遺物は出土していない。

3 調査のまとめ

本調査では、A区とB区の2地点で発掘調査を行った。A区では、遺跡保護の視点から現地表下35cm以下の埋蔵文化財に関して現地保存とした。文京遺跡41次調査では、理学部構内南西部でも、縄文時代～中世の造構・遺物が出土しており、現地保存地点を含めた周辺地域における掘削を伴った開発を実施する際には、発掘調査等の対応が必要である。

(三吉)



写真205 00913調査B区完掘状況（南西から）



図38 00913調査区平面図・土層柱状図 (縮尺1/300・1/40)

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

— 2009年度 —

愛媛大学埋蔵文化財調査報告 XXII

2011年 2月28日

発 行 愛媛大学埋蔵文化財調査室
〒790-8577 松山市道後橋又10-13

TEL・FAX 089-927-9127

印 刷 原印刷株式会社
〒799-1594 今治市喜田村1丁目2-1
TEL 0898-48-5511